福島県文化財調査報告書　第94集

梁　川　城　跡

――二ノ丸土塁発掘調査報告――

1981年2月

福島県教育委員会

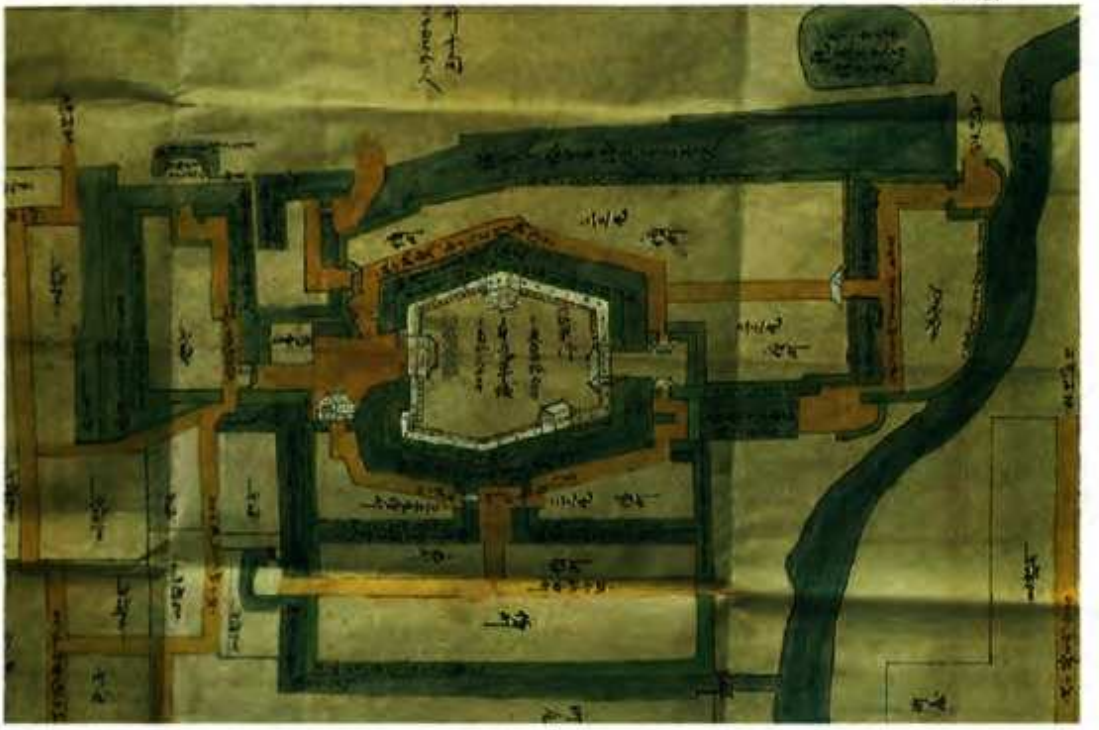
梁川城跡

——二ノ丸土塁発掘調査報告——

YANAGAWA

編　集

福島県教育庁文化課



上．梁川城古図(部分)（米沢市立図書館蔵）　下．梁川城跡周辺空中写真（1：8000）

序

伊達郡は，仙台藩伊達氏の旧地でありその古跡が数多く存在していますが，その居城として著名なものが梁川城（梁川町所在）であり西山城（桑折町所在）であります。特に，前者は伊達氏14代稙宗が奥州守護職に補任されるや，その府城として栄えたのであります。しかし現在は，公立学校や住宅などが建ち並び往時の繁栄の姿を全てにわたって見ることはできませんが，本丸庭園・東櫓・土塁，三ノ丸跡（現在は町の史跡公園）・桜館跡（新公園）そして二ノ丸土塁・濠（金沢堀）などにその面影を偲ぶことができます。

さて，今般当梁川城跡内に存する福島県立梁川高等学校が永年の希望である学校用プール建設を計画し，これによって二ノ丸土塁の一部が失われることになりました。そこで，各関係機関と協議を重ねた結果，記録保存のための発掘調査を実施することに決定いたしました。

本書は，その成果をまとめたものであり，今後の梁川城及び関連施設等の研究に何らかの形で参考となれば幸いと存じます。

最後になりましたが，本調査のために御協力・御助言下さった梁川町教育委員会・梁川高等学校をはじめとする多くの関係機関に心より感謝の意を表す次第です。

昭和56年2月

福島県教育委員会
教育長　辺　見　栄之助

例　　言

1．本書は，昭和54年度及び昭和55年度に実施した梁川城跡（二ノ丸土塁）発掘調査の報告書である。

2．本調査は，福島県立梁川高等学校プール建設事業に伴うもので，発掘調査主体者は福島県教育委員会である。これは文化財保護法第57条３第一項及び同法第98条２第一項の規定による。

3．本事業に係る費用は県費負担であるが，梁川高等学校の協力も得ている。

4．発掘調査は，福島県教育庁文化課が主管し３次に亘って実施した。各次の期間及び調査担当者は以下の通りであるが，調査体制の詳細については後述する。

第１次調査　昭和54年10月１日～10月５日（５日間）　文化課文化財主事　木本　元治

第２次調査　昭和55年１月８日～１月10日（３日間）　文化課文化財主事　木本　元治

第３次調査　昭和55年４月17日～５月19日（21日間）　文化課文化財主事　日下部善己

5．発掘調査面積は，約550㎡である。

6．出土遺物整理及び報告書作成の作業は文化課分室にて実施したが，佐藤利夫氏（川俣町立川俣小学校勤務）には特にお世話をおかけした。

7．各作業過程において以下の機関の御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

梁川町教育委員会　　福島県立梁川高等学校　　(財)福島県文化センター事業第二部遺跡調査課

8．梁川城に関する歴史的位置やその資料については，福島大学教授小林清治博士の論文と日頃の御指導，そして梁川町教育委員会刊行書籍や御教示によるところが大でありここに特記する。

9．梁川城跡発掘調査及び報告書作成過程において以下の方々の御指導と御助言をいただいた。記して謝意を表する。（　）内は所属

陶磁器及び瓦類	藤沼　邦彦（東北歴史資料館）		石質同定	八島　隆一（福島大学教育学部）
〃	進藤　秋輝（多賀城跡調査研究所）		石　塔	野崎　　準（日本金属学会附属博物館）
〃	高野　芳宏（　〃　）		関係資料複元図	菊池　利雄（福島県史学会）
梁川城古図他	菊地　伸之（市立米沢図書館）		全　容	鈴木　　啓（日本考古学協会）
〃	下平　才次（米沢市史編さん室）		〃	谷口　　悟（梁川町郷土史研究会）

10．上記の他，渡辺　武男氏の御援助も得ている。

11．本書中の遺構図に示す基準線の数字は海抜高度である。また，遺構，遺物の計測値は特に注記しない限り全て最大値を採っている。

12．本書の「資料」は菊池利雄氏によるが，その他の執筆・編集はすべて日下部善己が行った。

13．本調査に関する資料についての営利目的以外の活用は任意であるが，出典等は明示されたい。

目　　次

序　　文……福島県教育委員会教育長　辺見　栄之助
例　　言

第Ⅰ章　遺　　跡……2
第1節　位置と地形……2
第2節　歴史的環境……3

第Ⅱ章　調査経過……7
第1節　往時の調査……7
第2節　調査に至る経過……9
第3節　調査日誌……9

第Ⅲ章　遺　　構……11
第1節　土墨・濠……14
第2節　集石遺構……14
第3節　木組遺構……18
第4節　その他の遺構……20

第Ⅳ章　遺　　物……22
第1節　土製品……22
第2節　石製品……24
第3節　木製品・その他……30

第Ⅴ章　総　　括……33
第1節　遺構・遺物について……33
第2節　遺跡について……35

資　料　梁川城関係略年表……35

参考文献……37
調査要項……39
写真図版

挿　図　目　次

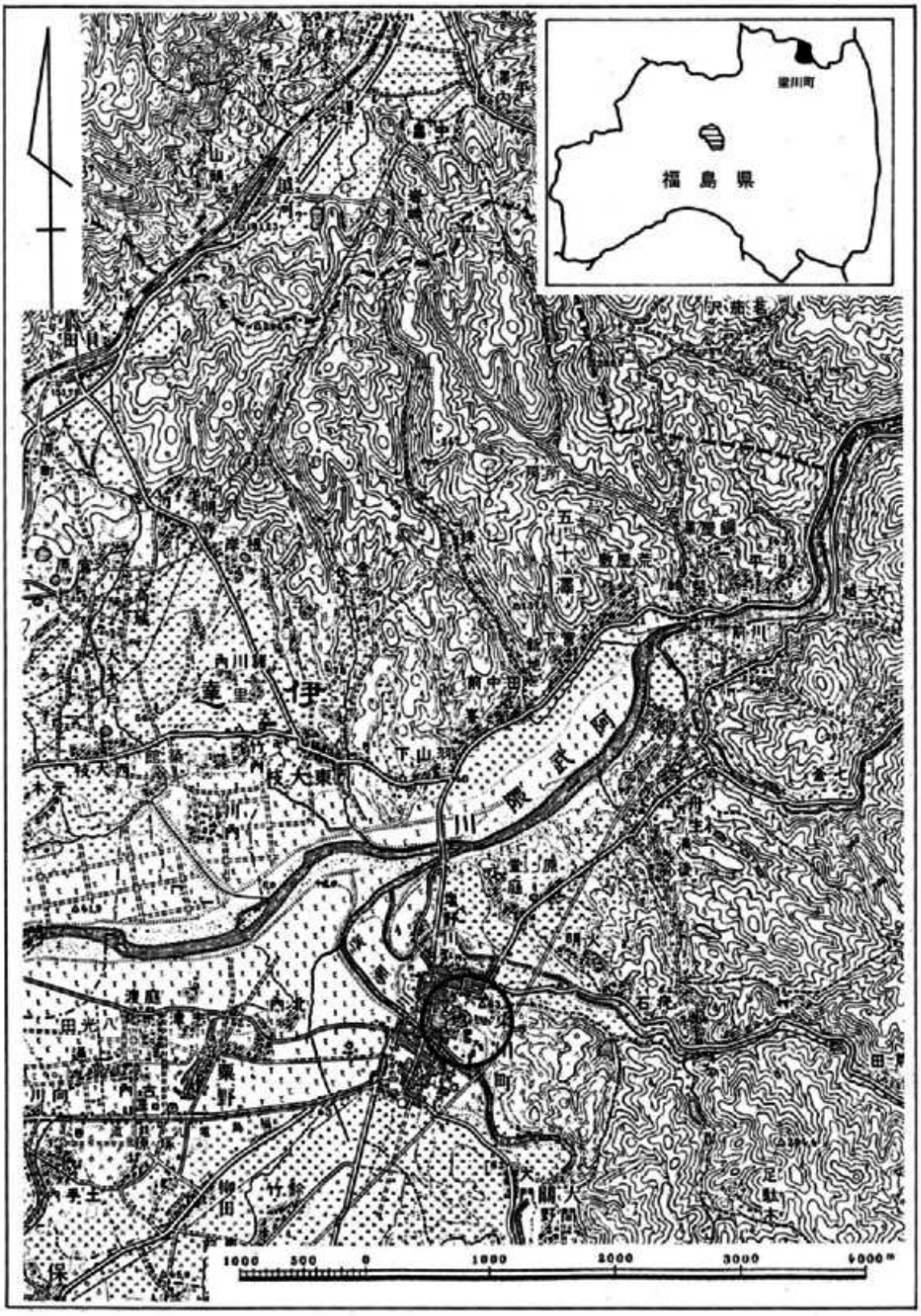
第1図　遺跡位置図……1
第2図　遺跡周辺地質概念図……2
第3図　梁川城古図……4
第4図　梁川城復元図……5
第5図　梁川城跡現況図〔部分〕……6
第6図　トレンチ及び遺構配置図……10
第7図　二ノ丸土塁実測図……12～13
第8図　第1号集石遺構……15
第9図　第2号集石遺構……16～17
第10図　木組遺構……19
第11図　トレンチ土層断面図(1)……21
第12図　トレンチ土層断面図(2)……22
第13図　土製品・金属製品……24
第14図　石臼類・五輪塔計測箇所・粉挽き臼……26
第15図　石製品(1)……27
第16図　石製品(2)……28
第17図　石製品(3)……29
第18図　木製品(1)……31
第19図　木製品(2)……32
第20図　梁川城絵図〔部分〕(広島市立中央図書館浅野文庫蔵)……33
第21図　西山城復元図……34

表　目　次

第1表　周辺の城館跡一覧表……3
第2表　梁川城跡発掘調査の概要……7
第3表　土製品一覧表……23
第4表　石臼類一覧表……25
第5表　木製品一覧表……30

図　版　目　次

口絵(カラー)　梁川城古図〔部分〕(市立米沢図書館蔵)
梁川城跡周辺空中写真
図版Ⅰ　梁川城跡航空写真
図版Ⅱ　梁川城絵図（北海道開拓記念館蔵）
大森城跡遠景
大仏城跡遠景
松前城跡
図版Ⅲ　梁川城跡遠景（東より）
梁川城跡・磨崖仏遠景（南より）
梁川城図（蠣崎波響筆）
図版Ⅳ　本丸東櫓（石垣）
本丸土塁
二ノ丸土塁遠景（北より）
二ノ丸濠（金沢掘）
三ノ丸掘（土橋上より）
図版Ⅴ　二ノ丸土塁近景（東より）
土塁発掘状況（西より）
土塁北トレンチ
第1号集石遺構
第1号集石遺構
図版Ⅵ　発掘状況
第5トレンチ北壁土層
第2号集石遺構（南より）
第2号集石遺構（北より）
木組遺構
図版Ⅶ　出土遺物(1)
図版Ⅷ　出土遺物(2)



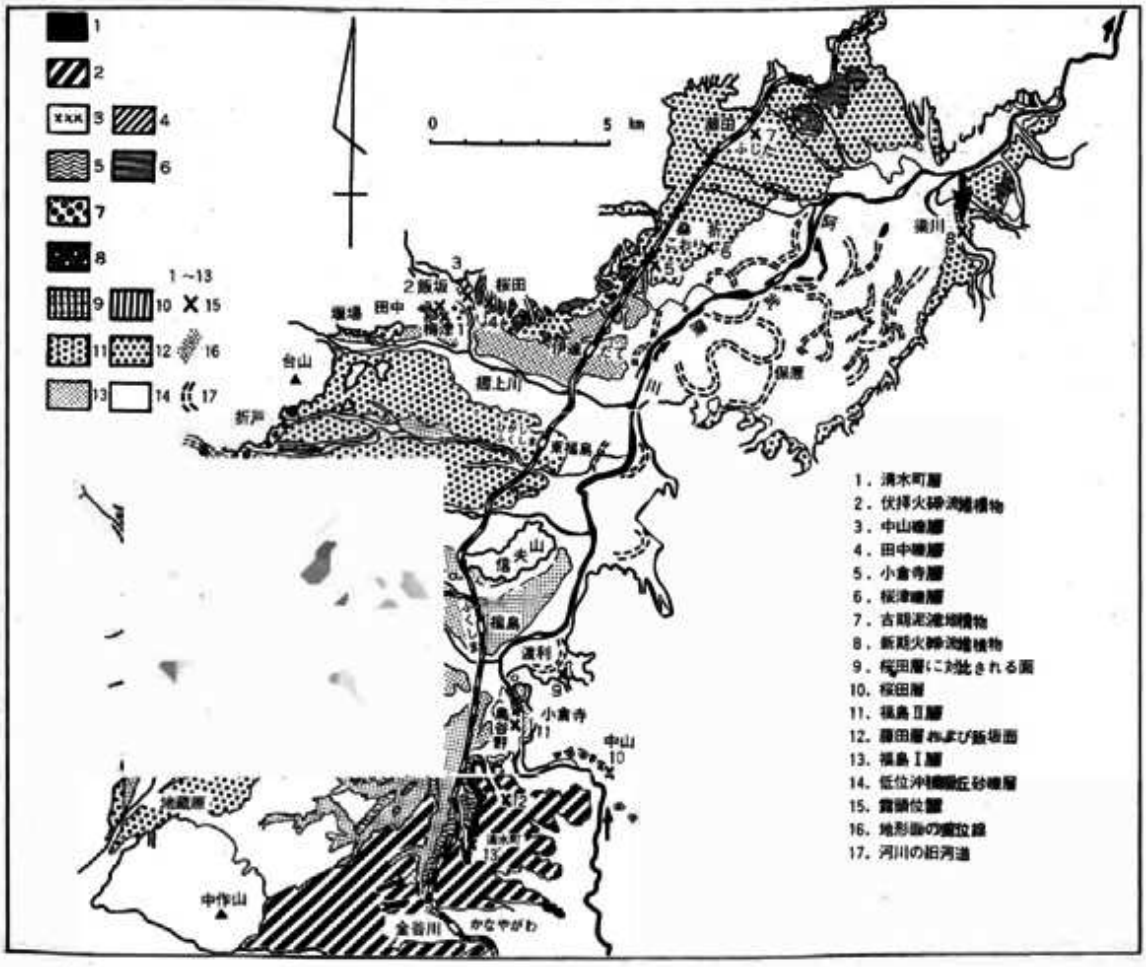
第1図　遺跡位置図　（1：50,000 縮折）

第Ⅰ章　遺　　跡

第1節　位置と地形

梁川城跡は，福島県伊達郡梁川町字鶴ケ岡・桜岳他に所在し，国鉄東北本線桑折駅の東方約8.2km同藤田駅の東方約6.8kmの丘陵先端部に位置する。城の北は塩野川，南は広瀬川によって形成された谷によって画され，西は阿武隈川などによって作られた肥沃な耕地を望むことができる。この低地との比高は約12mであり，斜面は著しく急である。地形分類上，この丘陵地（台地）は，藤田面（対比面）に相当し，同様な立地を示す城館跡として国見町築館跡や桑折町伊達崎城跡がある。

当城跡内には，町立幼稚園，小学校，中学校，県立高等学校や住宅が林立し，わずかに本丸庭園，二ノ丸土塁・空濠，桜館（新公園）そして三ノ丸公園の中に往時を偲ぶことができる。城下の堀，道，町割などにも往時の姿が残っているが，多くは近年の開発（宅地化など）によって失われているのは，他の城下町の例と同様である。



第2図　遺跡周辺地質概念図　（吉田他　1968より）　矢印：梁川城跡

第2節　歴史的環境

本城周辺にも多くの遺跡が存在するが，比較的関係が深いと思われるものを中心としてその特色などについて述べておくことにする。まず，本城の東の山頂には茶臼館と呼ばれる山城が存在し，頂上には2つの郭が空堀を挟んで併立し，周辺は帯郭が廻っている。これは，その位置・形態などから「詰の城」としての機能を有するものと考えられている。一方，西方約8.8kmには桑折町西山城があり，郭，土塁，空堀などが現存している壮大な山城である。これが天文の乱の舞台となったことは周知の事実である。この他，伊達の家臣団の館跡としては，石母田城，森山館，山崎城（国見町）や，館山（東大枝）などがある。

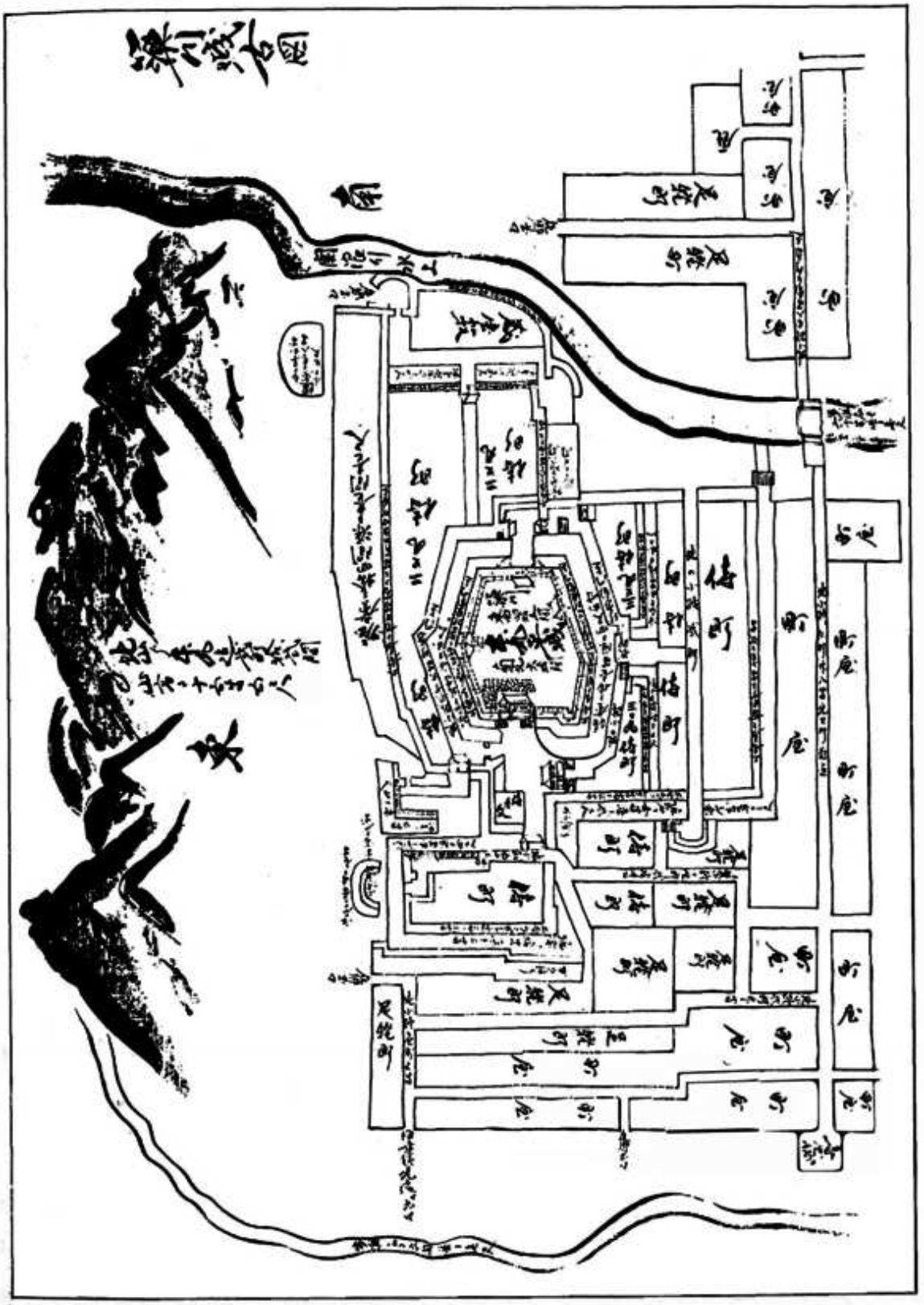
この他，梁川八幡神社が城の北方約1kmにあり，また五輪塔を数多く出土した遺跡も存在する。一方，当城の広瀬川岸の崖には磨崖仏が存在しているが，これらの諸遺跡については，野崎準氏が詳細に調査され報告されているので氏の論考によることとしたい。

さて，以上は主として中世（天文の乱ごろまで）のことを念頭に置いているが，近世には，数多くの大名たちが交互にこの地を領しており，城内の様子については，梁川町教育委員会の努力によって見つけ出された3枚の絵図によって知ることができる。それらによれば，今回の調査地点は二ノ丸ないしは桜館といわれる部分に相当することが知られる。

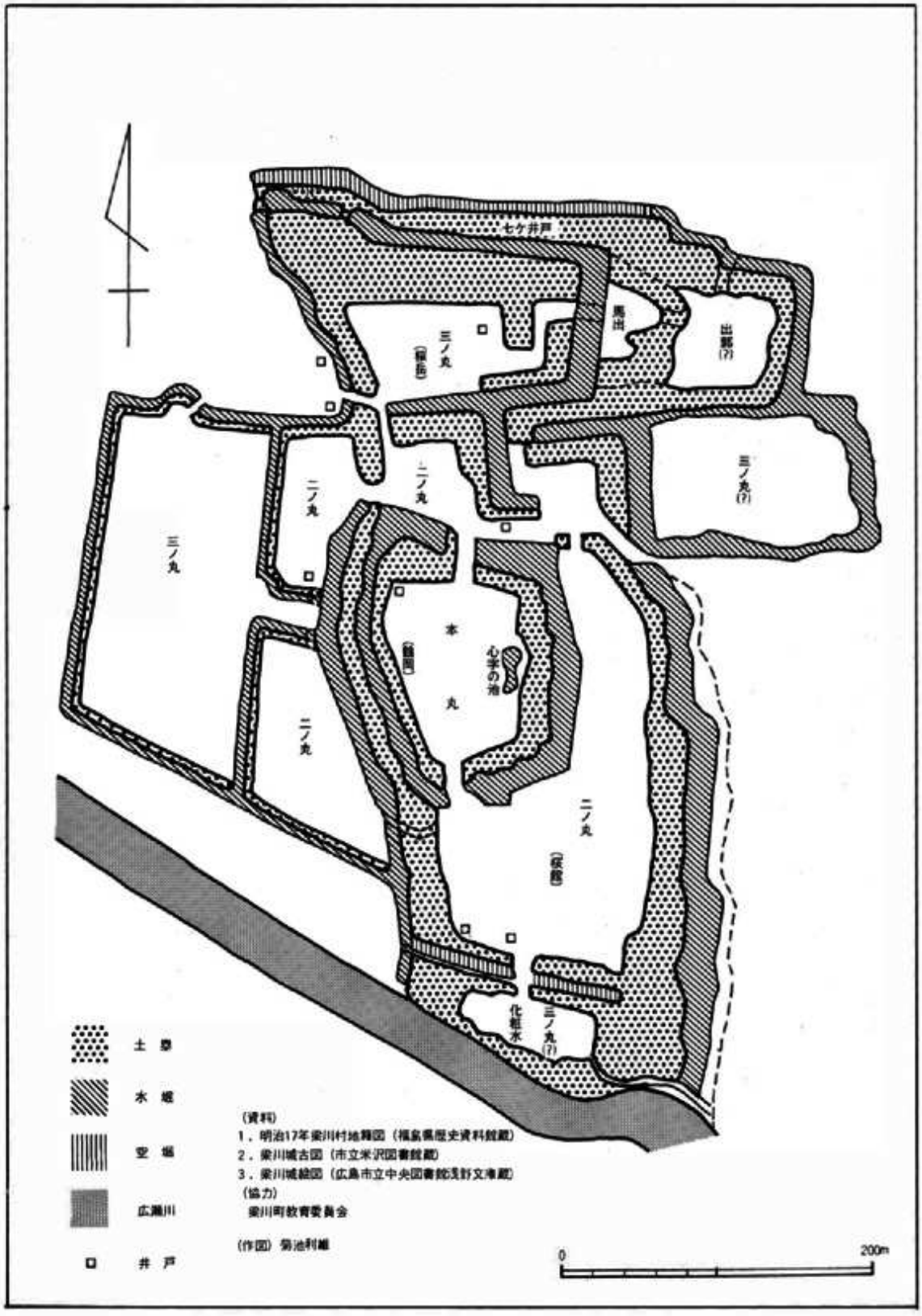
第1表　周辺の城館跡一覧表

番号	名称	所在地	事項	備考
1	関波城跡	梁川町大関	霊山支城	
2	袖ケ崎城跡	〃　大字東大枝字館	大条孫三郎，文和年中	
3	梁川(粟野)大館	〃　字大館	伊達義広？	
4	高子館跡	保原町大字上保原字高子	伊達朝宗，文治5年？	
5	中島城跡	〃　城之内	伝伊達為重，文治年中	
6	西山城跡	桑折町万正寺本丸	朝宗～植宗，本丸，二丸，三丸，墨濠	本書に復元図掲載
7	播摩館跡	〃　庫場	桑折播摩保春，大永年間	
8	常陸館跡	〃　万正寺常陸館		
9	伊達崎館跡	〃　伊達崎	伊達崎大郎実綱	
10	藤田城跡	国見町山崎古館	源頼朝，伊達氏	発掘調査（一部）文献1)
11	石母田城跡	〃　石母田館ノ内	石母田安房，郭，堀，土塁	
12	森山城跡	〃　森山堀之内	富塚氏	
13	阿津賀志山防塁	〃　石母田，大木戸，森山，西大枝	源頼朝，藤原泰衡，文治5年	発掘調査（一部）文献3)、(4)
14	懸田城跡	霊山町掛田字館	懸田氏，建武～応永年間	

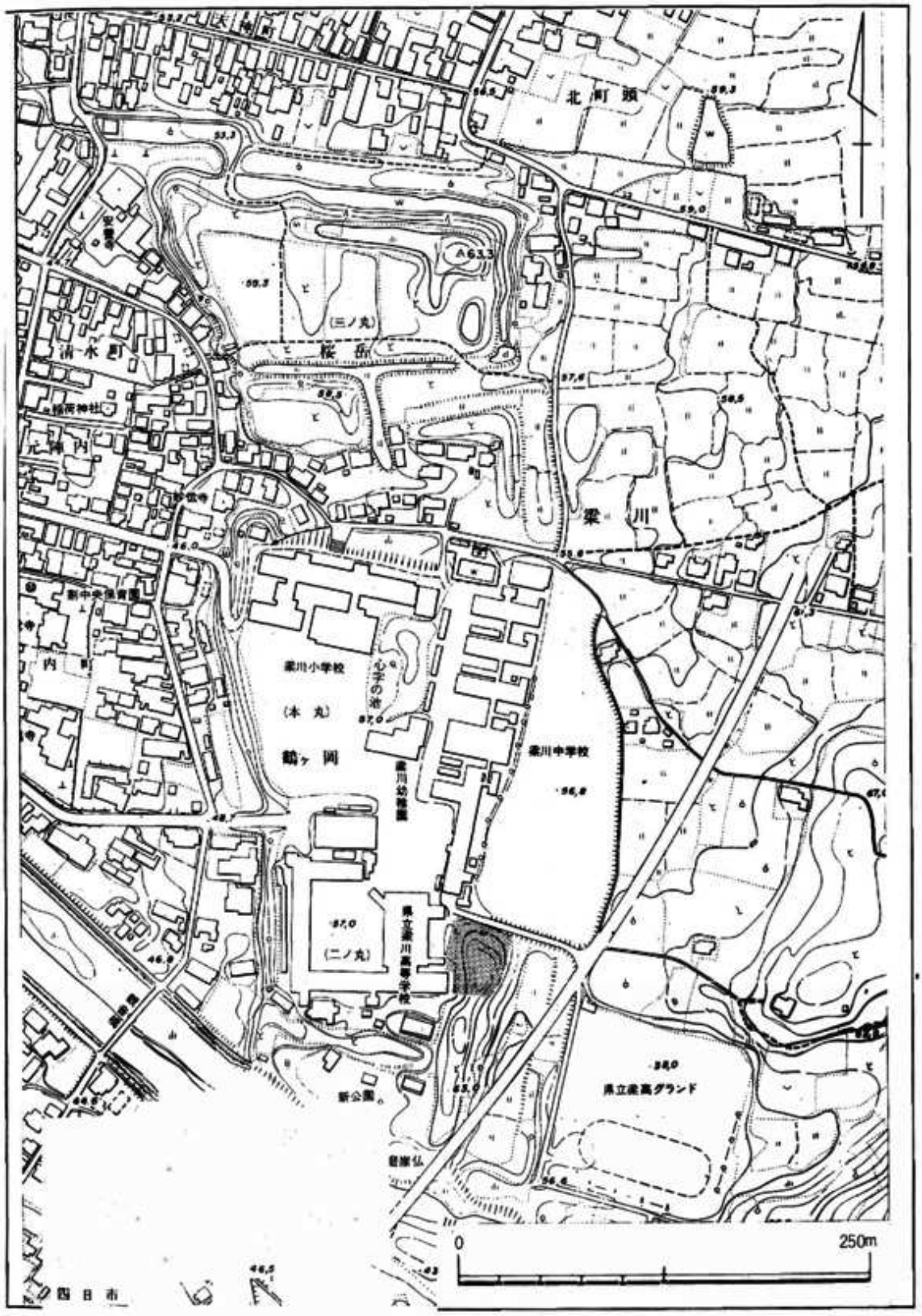
※事項は，主として文献(1)による。



第3図　梁川城古図　市立米沢図書館蔵の写　　梁川町教育委員会『梁川城跡』所収


七ケ井戸
馬出
出郭(?)
三ノ丸
(桜馬場)
三ノ丸(?)
二ノ丸
二ノ丸
三ノ丸
本丸
(鐘楼)
心平の池
二ノ丸
二ノ丸
(侍屋敷)
化粧水
三ノ丸(?)
土塁
水堀
空堀
広瀬川
井戸
(資料)
1．明治17年梁川村地籍図（福島県歴史資料館蔵）
2．梁川城古図（市立米沢図書館蔵）
3．梁川城絵図（広島市立中央図書館浅野文庫蔵）
(協力)
梁川町教育委員会
(作図) 菊池利雄
0
200m

第4図　梁川城復元図



第5図　梁川城跡（部分）現況図

調査対象地区

第Ⅱ章　調　査　経　過

第1節　往時の調査

奥州の覇者，伊達氏居城として栄えた梁川城跡に対する考古学的調査は，過去に5度実施されている。昭和49年度及び昭和51年度の調査は，町営住宅建設事業に伴うものであるが，他の3回は本丸跡心字の池復元工事に伴う調査である。出土資料等はいずれも町教育委員会が保管している。これらの他に，昭和31年の梁川高校グラウンド造成中に出土した遺物が同校に保管されている。

5度に亘る調査の概要は以下に記す通りであるが，遺構として注目されるのは，本丸跡庭園・建物，二ノ丸跡土塁・濠，三ノ丸跡土塁・濠などであり，遺物としては，瓦，陶器，磁器（青磁，白磁），粉挽臼，茶臼，擂鉢，古銭などであろう。

なお，正式報告書未刊の調査年次については，現地説明会資料などに依っているので記載事項中の重複，欠落などがある可能性が高いことを付記しておきたい。この点については本報告書の刊行の折に各年次担当者により訂正されることになろう。

第2表　梁川城跡発掘調査の概要

No.	調査地区	調査目的及び調査期間	調査主体者	調査担当者・調査員	遺構	遺物	文献
1	三ノ丸（梁川町字桜岳29他）	町営住宅建設に伴う事前調査 昭和49年10月7日～10月12日	梁川町教育委員会	野崎　準 幕田　昌司 宮本　利彦 町教委・公民館職員	○礎石建物……1 ○掘立柱穴群…1 ○石敷及石列…5 ○井　戸……1 ○焼　土……3	古銭（皇宋通宝1，永楽通宝2，熙寧元宝1，元豊通宝1） 鉄製品，鉄滓 土師質土器（灯明皿，甕或は大鍋，火舎） 瓦質土器（火舎，擂鉢） 陶質土器（鉢，甕，擂鉢） 陶磁器（灰釉小皿） 爛羽口，丸瓦， 焼　米，石鏃，剝片 馬　歯	(9)
2	本丸東櫓（梁川町字鶴ケ岡1）	本丸庭園「心字の池」復元工事に伴う予備調査	梁川町教育委員会	鈴木　啓 幕田　昌司 宮本　利彦	○櫓跡石組……1 （石垣・野面積）	古銭1，鉄滓2 鉄製品（角釘2他） 土師質土器（灯明皿3，火舎1） 瓦質土器（擂鉢，甕） 瓦（丸瓦1），石臼2	(10)

No.	調査地区	調査目的及び調査期間	調査主体者	調査担当者・調査員	遺構	遺物	文献
		昭和50年 8月19日 ～ 8月21日				獣骨2	
3	三ノ丸 (梁川町字桜岳27他)	町営住宅建設に伴う事前調査 昭和51年 6月8日 ～ 7月31日	梁川町教育委員会	目黒　吉明 柴田　俊彰 根本　信孝 大越　道正 渡辺　昌宏 福島大学考古学研究会	○礎石建物 ○掘立柱建物 ○石組列 ○大溝（空堀）	古銭（皇宋通宝，永楽通宝他） 土器片，灯明皿片 陶器片（擂鉢他） 鉄製品（刀，鉄鏃） 鉄滓 瓦（軒瓦他），木片 石臼 獣骨（馬歯他）	(11) (12)
4	本丸 心字の池 (梁川町字鶴ケ岡1)	「心字の池」復元工事に伴う事前調査（環境整備） 昭和53年 5月15日 ～ 10月31日	梁川町教育委員会	鈴木　啓 町教育委員会職員	○心字の池（汀線他）	古銭（寛永通宝，永楽通宝，宣徳通宝，洪武通宝等多数） 鉄製品（釘，のみ） 青銅，鉛 土師質土器（灯明皿，火鉢） 瓦質土器)(擂鉢)，皿 石製品（石臼，茶臼，粉ひき臼，砥石） 木片，木炭，くるみ，焼米，骨片	(13)
5	本丸 (梁川町字鶴ケ岡1)	「心字の池」と本丸建物群との関連追求 昭和54年 10月5日 ～ 12月7日	梁川町教育委員会	鈴木　啓 野崎　準 辻　秀人 谷口　悟 高田　貞夫 加藤　真人	○掘立柱建物……4以上 ○溝……8 ○石敷群……4 ○石列群……3	古銭（熙寧元宝，永楽通宝，洪武通宝，寛永通宝他） 銅製品（火箸3他） 鉄製品，鉄滓，硯，石臼（ひき臼，茶臼） 石製容器，陶磁器（灯明皿，青磁，白磁），羽口，火鉢，獣骨，炭化穀物，漆器	(14)
その他	梁川高等学校グラウンド発見の資料				瓦（丸瓦15，平瓦19），塼2，石臼3，石製容器片1，爐羽口1，瓦質土器1，灯明皿，縄文土器及び弥生土器片若干		(16)

※文献欄の番号は巻末の参考文献番号に対応する。この他昭和55年度にも本丸跡調査（担当・鈴木啓）が成された。

第2節　調査に至る経過

梁川城跡内に所在する梁川高校には，今日まで学校プールが設置されておらず教育上いくつかの困難性があった。そこでプールを建設し学校教育の目的の達成を図ろうという気運が生れ，その運動はＰＴＡ，学校そして地域の関係者によって展開されていた。その結果，昭和54年度敷地造成，昭和55年度プール本体工事という年次計画が打ち出された。

一方，この用地は梁川城跡二ノ丸土塁の一部分に当り，「金沢堀」と呼ばれる巨大な濠と対を成しており，梁川中学校敷地内にもかつて存在していたものの残存部であった。そして，この土塁と濠は，梁川城を独立丘陵化するための重要な施設と考えられ，県教育委員会としてもその保存に万全の策を講ずべく関係機関と協議を重ねたのである。

幸いにも土塁部分を全て削除することはなく片側のみの切土ということもあり，またゆとりのある学校教育の環境づくりも重要な課題であるので発掘調査による記録保存の策を選択したのである。この間，町教育委員会には大変な心労をおかけし，その真摯なる御助力に心より感謝申し上げる次第である。

さて，発掘調査は土塁周辺の地形測量及び断面図作成作業より開始し，敷地造成部分までの深度で調査を行い（第１次調査），次に造成工事中に発見（町教委の立会いによる）された遺構についての部分的調査，即ち工事に支障のある部分についての発掘調査（第２次調査）を行った。以上を昭和54年度中に実施し，残った調査地区については昭和55年度のプール建設工事着手以前という制限もあり，年度当初より調査に入った（第３次調査）。

第3節　調査日誌

1．第1次調査

昭和54年10月１日（月）　土塁周辺の藪の刈払いを行いその形状を写真に納めた。また，地形図（土塁実測図）作成のためのトラバース設定を行った。

10月２日（火）　１：200の縮尺で土塁の実測を開始し，その等高線間隔は0.5mとした。

10月３日（水）　土塁実測図作成作業を継続し，一方盛土観察用トレンチを二本設定してバックホーによって調査を進めた。午後は雨天となり野外作業を中止した。

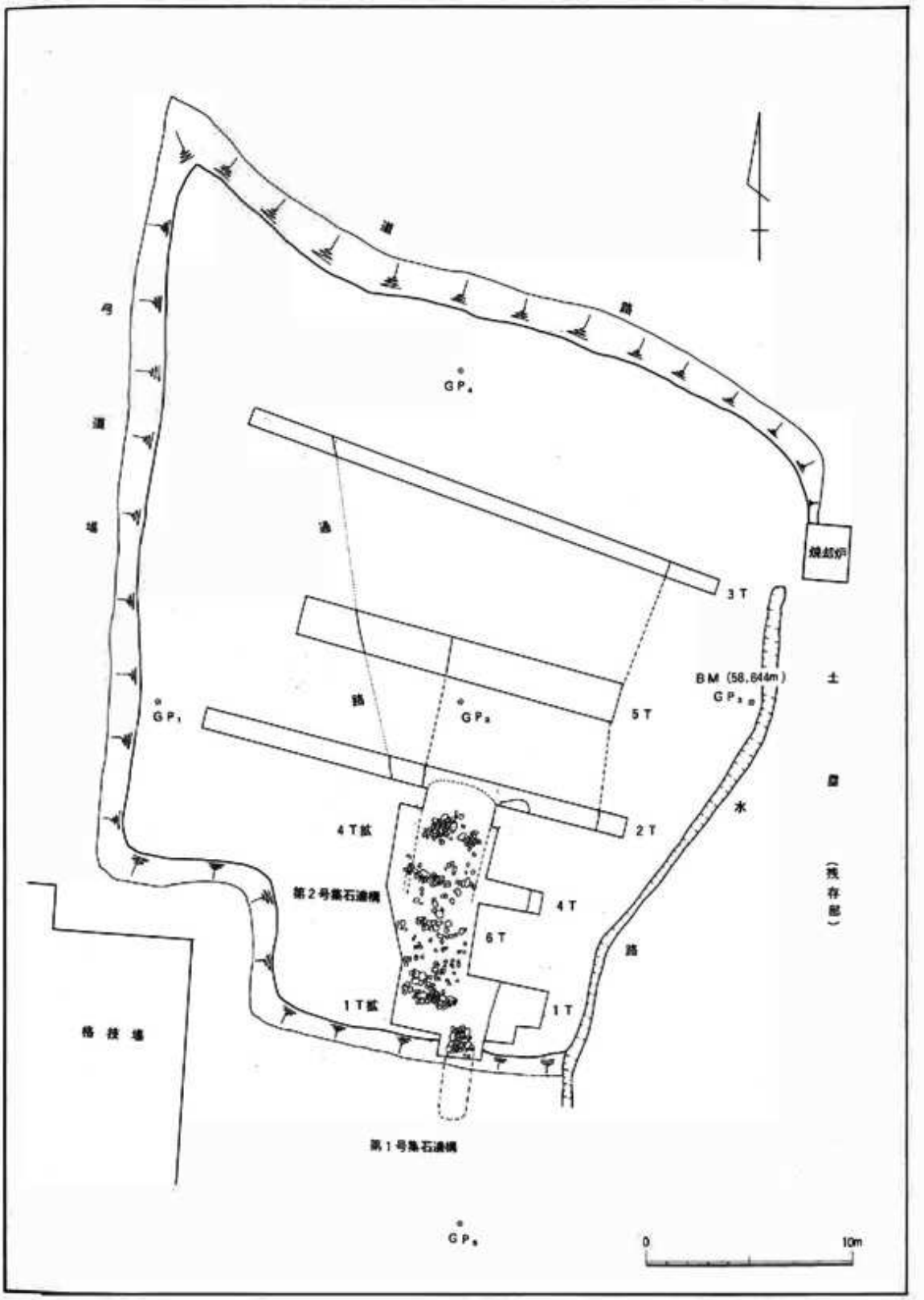
10月４日（木）　土塁実測が完了し，トレンチ壁面の精査を実施した。

10月５日（金）　トレンチ壁面精査と実測を行い，写真撮影も併せて実施し敷地造成面までの調査を終了した。

2．第2次調査

昭和55年１月８日（火）　曇一時雨　プール用敷地造成中に遺物が出土した由の報告を町教育委員会より受け急ぎ調査を行った。石組列が確認され，中には石臼なども含まれていた。これを第１号集石遺構と名付け写真及び実測を行った。

１月９日（水）　晴れ　昨日よりの作業を継続しその終了後に石臼，瓦片などを収納した。また基準杭を打ち昭和55年度の第３次調査に備えた。なお，これらの出土遺物は，町教育委員会の手で文化



第6図　トレンチ及び遺構配置図　（Tはトレンチ、拡は拡張区の略）

課分室へ搬入された。

1月10日（木）　曇　図面のチェックなどを行った。この後出土資料は分室において整理・実測した。

3．第3次調査

昭和55年4月17日（木）　雪のち雨　第2次調査地区以外の部分の調査のために第3次調査を開始したが，時ならぬ雪という荒天下で発掘器材の運搬と防護柵の設定を行った。

4月18日（金）　晴れ　梁川高校より天幕を二張借用し設置した。また，東西一南北線上に基準点を5点設定し東の点（GP3）をBM（海抜高度58,644m）とした。南より北へ3本のトレンチを設定し遺跡の全体像把握に努めようとした。この他，全景写真，遺跡全体の踏査も実施した。なお，この2日間をもって調査員福島は他の部所へ移った。

4月21日（月）　曇　～　4月30日（水）　曇のち晴れ　まず第2トレンチより掘り込みを開始した。一方，第1トレンチに第1号集石遺構の残存部の存在が予想されたので拡張して（第1トレンチ拡張区）調査した結果，石組が検出された。第2トレンチに溝状の黒色ベルト層が確認されたので，第1トレンチとの中間に第4トレンチを，第3トレンチとの中間に第5トレンチを設定し調査を進めた。

5月1日（木）　雨　～　5月12日（月）　曇　雨天のためトレンチ内があたかもプールと化し，排水用ポンプを導入したが作業は遅れ気味となった。第4トレンチと第1トレンチの中間に第6トレンチを設定し，第4トレンチを北へ拡張し（第4トレンチ拡張区）て調査したが，いずれの地区でも多数の石が確認され，これを第2号集石遺構とした。

5月13日（火）　曇一時雨　～　5月16日（金）　雨　第2号集石遺構中には石臼・石塔などが含まれていたが，これらの除去後，第4トレンチ拡張区付近から木材（丸太材）が井桁に組まれて検出され一見井戸跡を思わせた。しかし下部には何も存在せず一応木組遺構と呼ぶこととした。15日には町教育委員会の中立ちにより梁川高校PTA役員約20名ほどに対し発掘の成果と遺跡の重要性，保存の必要性についての説明を行った。この他，発掘に参加した梁川高校社会部生徒10数名に対しても成果の説明を行った。16日，器材を福島へ運搬した。

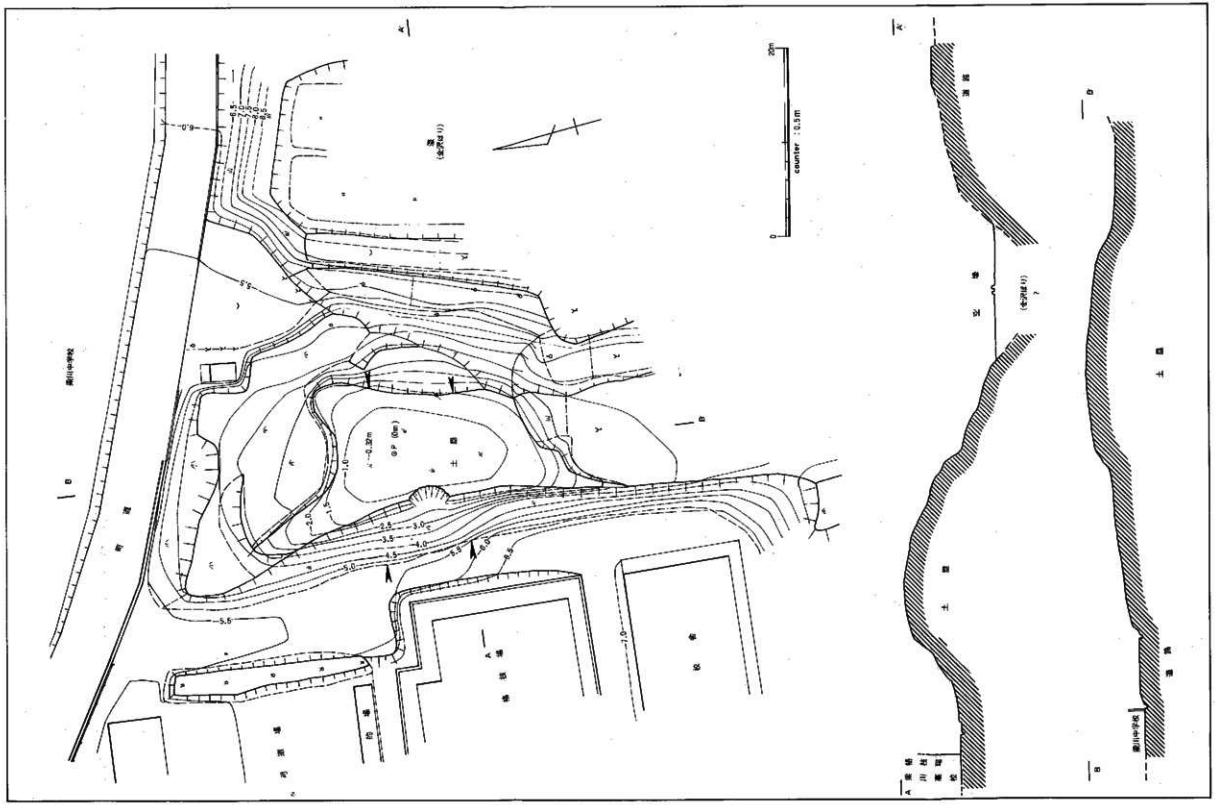
なお，19日（月）には太田工務店の協力によるバックホーにて第5トレンチ北の掘り込みを行ったが，黒色土は北側で立ち上がってしまうことを確認した。

さて，最後に各トレンチの大きさとGP間の距離を示しておくことにする（単位はm）。

第1トレンチ（2×7.2），同拡張区（2.1×6），第2トレンチ（1×21），第3トレンチ（0.9×24），第4トレンチ（1.2×7.6），同拡張区（3.6×4.9），第5トレンチ（1.9×15.9），第6トレンチ(3.5×4.6)，GP1～2（14.95），GP2～3（14.06），GP2～4（16.035），GP2～5（28.025）。

第Ⅲ章　遺　　構

梁川高校プール建設に伴う発掘調査によって検出された遺構は，土塁・濠（地表確認遺構），集石遺構，木組遺構及び溝（沼）状の落ち込み（地下確認遺構）などである。以下，順を追ってこの遺構に関する発掘所見を述べることにする。ただ，調査対象地区が約550㎡と限られているために，結論づ


0
20m
COUNTER : 0.5m
A
B
土盛
(未測量分)
(未測量分)
-0.5
-1.0
-1.5
-2.0
-2.5
-3.0
-3.5
-4.0
-4.5
-5.0
-5.5
-6.0
-6.5
-7.0
-0.9
-5.5
-6.0
-7.0
-0.32m
0.0 (0m)
道路
道路
道路

けることが不可能な部分も多い。

第1節　土塁・濠

梁川城を台地より切り離し，あたかも独立丘陵化するための施設がここに述べる土塁と濠（金沢堀）である。即ち，西方に突出した舌状台地（丘陵先端部）に城郭を構えることを目指すとすれば，西の段丘崖と南北の谷が大きな防禦線となるが，東方のみは何ら自然的要害に恵まれず，ここが最大の弱点となるのは明白である。この欠点を補うのが，東二ノ丸の土塁と濠（堀）であり，これを造ることによって当城は，正に一つの城として機能できるのである。

さて，今回の工事は，この土塁を縦に切断する形となり，このために，土塁の完全な横切断はできず一部不明な点もあるが，以下現況観察及び発掘所見を述べて行く(第７図)。

A－A′断面によってこれらの規模を見て行くと，まず土塁は基底部幅（敷）24.5m，上辺幅（褶）10.6m，高さ5.5m，内法5m，外法8.9mを測り，濠は，幅27.5m，深さ3.7m（水田面までの深さ),現在の水田幅約15mを測る。もちろん実際の濠の深さは，これ以上あるはずである。以上の計測値から土塁上と濠底部（現水田面）比高は約9.2mとなり，土塁，濠の全体幅は50mを越え，もし現在の道路線が堀の東側上端とすれば，それは約60mを越す大施設となり，この施設の軍事的な重要性が明確に理解できる。ただ，この土塁の北側（道路側）は，低くなっており，また，西側も若干不完全な形をしており，後世に削平された部分があることがわかる。とすれば，土塁幅はより増大することになる。

ところで，この土塁は，東の濠を掘って積み重ねられたものと考えられ,その積土の状況はレンズ状に粘土がおかれていることがわかる。この様子は，土塁基底部周辺の調査によっても明確である。（第11・12図参照）

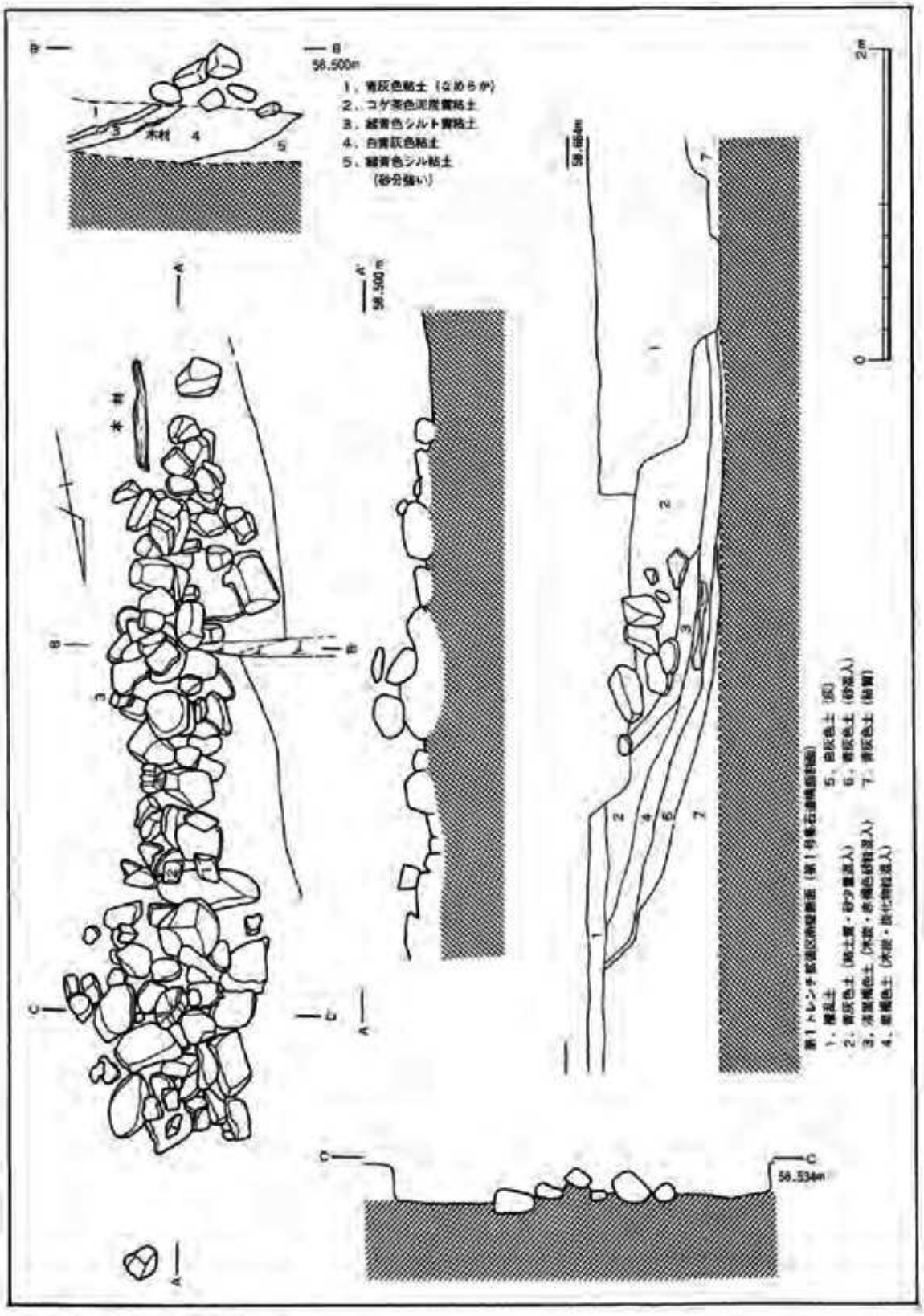
第2節　集石遺構

第１次調査後の土塁部削平工事によって発見された土塁基底部の集石は大別して２ケ所である。南側に検出された集石は帯状を呈し，工事との関係もあり，第２次調査時にその一部を調査したが，これを第１号集石遺構と名付けた。その後，第３次調査時にもこの集石の残存部を精査した（第１トレンチ拡張区付近)。一方，第４トレンチ付近を中心として多数の石が散乱しており，これを第２号集石遺構と名付けた。以下，各集石遺構の検出状況についての記述を進める。

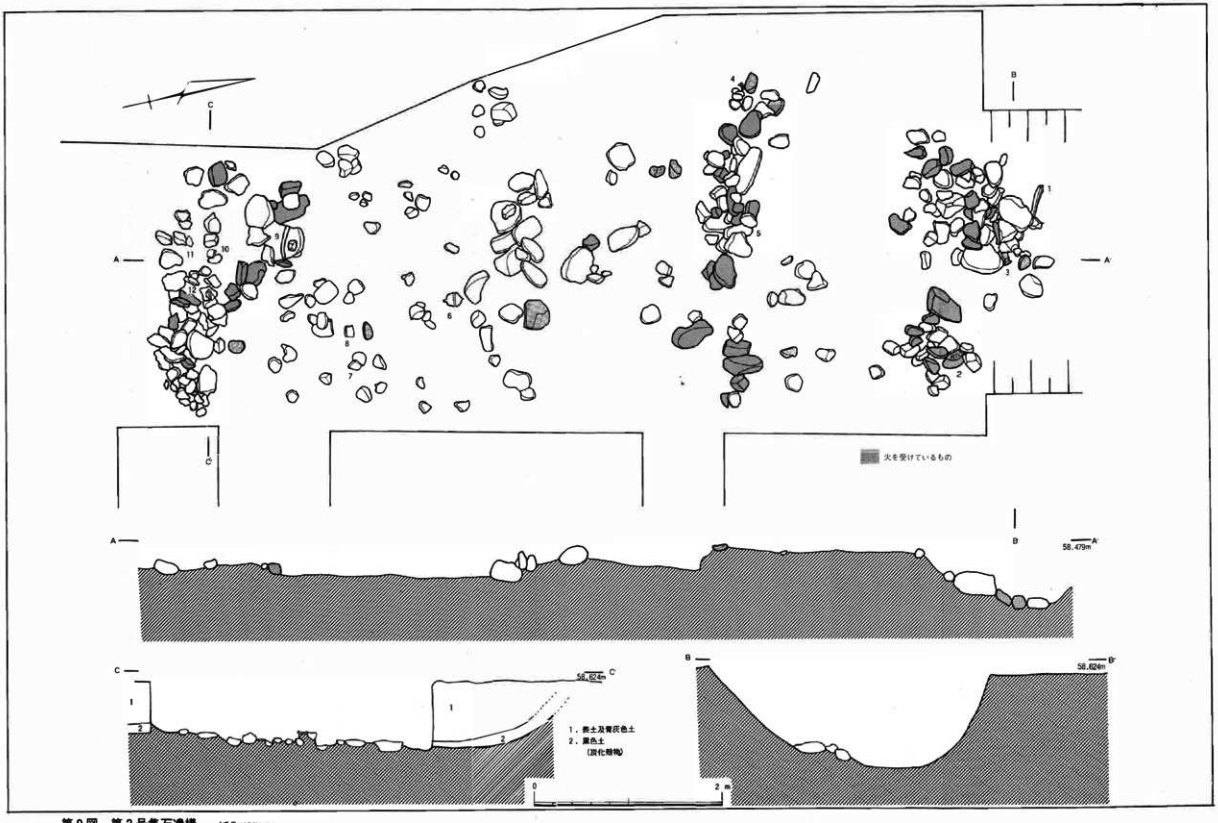
１．第１号集石遺構（第８図）

これは，その南側部分が工事中に発見されたことによって確認した遺構である。第２，第３次調査に亘って精査を行なった。

全長5.1m，最大幅1.33mを計り，大（55×28cm）小（10×10cm）様々な石が積まれており，多いところでは３～４段に重なっている。ただ，規則性を有してはおらず，むしろ無雑作に放棄したという感じが強い。石はほとんどが河原石であり，熱を受けたものもあるが付近の広瀬川や塩野川より搬入したものと考えられる。また，石塊の中には，石臼（擂き臼）の破片が幾つか混在しており，一方，瓦片も２点ほど確認することができた。



第8図　第1号集石遺構　（番号は遺物No.）



第9図　第2号集石遺構　（番号は遺物No.）

この他,丸太材(直径9㎝，長さ72㎝）も含まれていた。これは，青灰色の粘土層（グライ層）の中に存在しており，常に水分が保たれていたことを知ることができるが，土墨上部との関係を十分に把握できず，その性格については不明な点も多い。

2．第2号集石遺構（第9図）

第4トレンチ付近で検出された集石遺構で，石塊が散乱しており，人為的な放棄作業を感じることができる。これも第1号集石と同様に火を受けた石が多く含まれている（図中では網をかぶせたもの)。そして，中には，瓦片，土器片，陶器片，石塔の部分，丸太材や炭化穀物などが含まれており，自然の状態とは明らかに相異する。

全長9.64m，最大幅3.72mを測るが，これを，東西方向に走る4条の石列を中心とする集石と見ることも可能である。仮にこれを，北よりA，B，C，Dの石列とすると，各々全長（東西方向）は2.82m，3.54m，3.39m，2.70mとなる。しかし，これは結果論であり，A～Dを区別する発掘所見は特に存在しないが，このA～D付近に石が多数放棄されたことは事実である。

一方，A（第4トレンチ拡張区）付近には，底部が鍋底状を呈する黒色土のベルトが存在し凹地があったことを示している。これは，溝状を呈するが，第2トレンチでは収束してしまうのでむしろ池（沼）状の凹地を想定した方がよさそうである。しかし梁川中学校の地下の様子が不明なので速断は避けたい。また，この集石除去後に木組遺構が検出されたが，これらについては次に述べることにする。

第3節　木組遺構

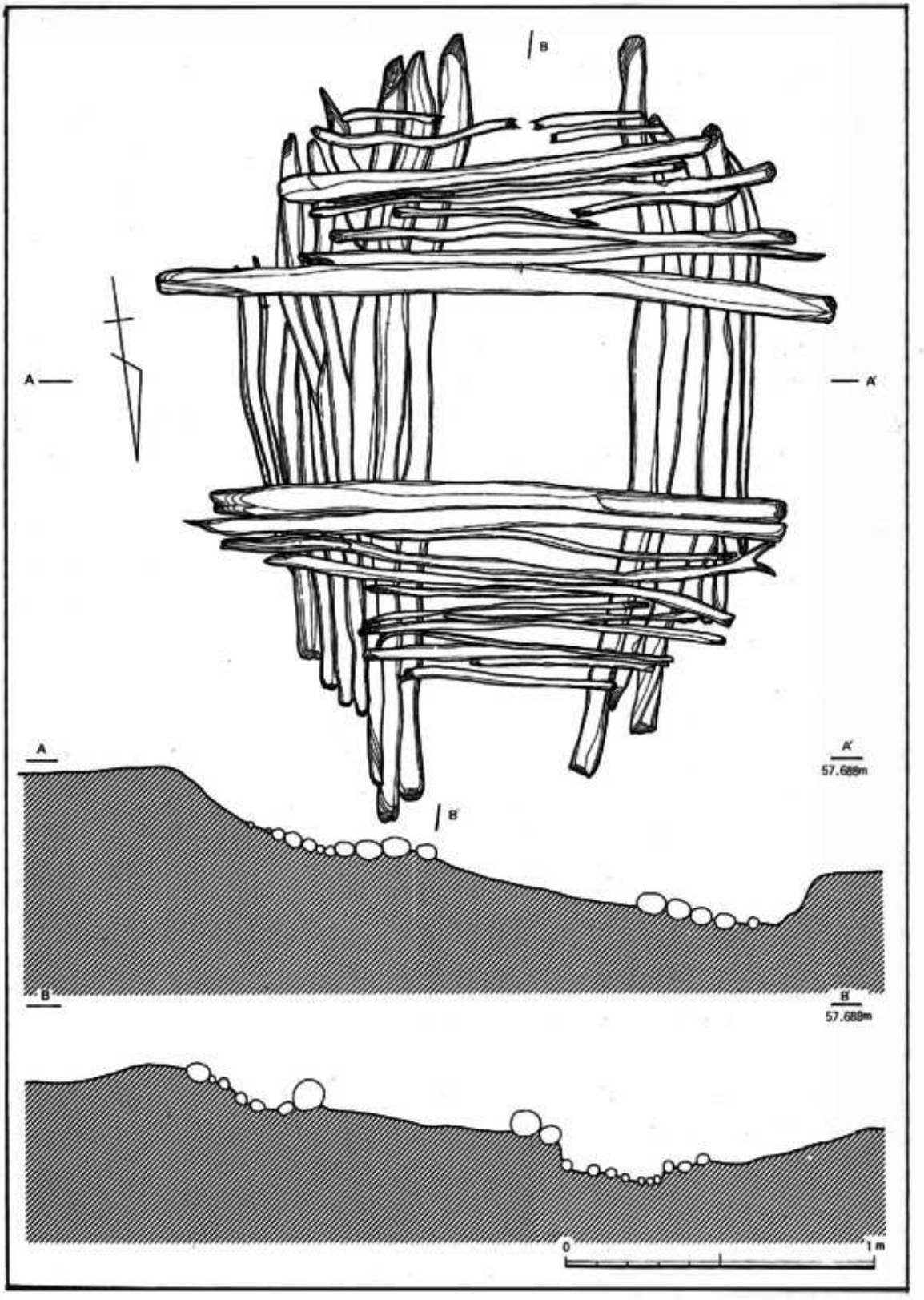
これは，第4トレンチ拡張区の西壁近くに位置し，第2号集石遺構を除去した後に検出された遺構である。ほぼ東西南北方向に木材が井桁に組まれ，一見井戸枠を想像させる。最大幅は，東西方向で2.9m，南北方向で2.55mを計り全体としては北西方向に傾斜している。以下，東方向に並んでいる木材を便宜上東木群とし，西南北方向も同様とする（第10図)。

各木群とも内から外方向へ移るにつれて長木から短木を配しており全体として円に近づけようとする意図がうかがえる。また，これらは，縄などで結ばれておらず，組み合せられただけであり相対的に太いものと細いものに区分することもできる。東西両木群の上に南北両木群が乗る形になっており，その圧力のため，下位の木群では，木が当った部分が凹んでいる。

以下各木群について説明を加える。まず，東木群であるが，径10㎝ほどのもの（主木という）と数㎝のもの（副木という）とに区別することが出来るが，主構成物は前者であり，後者はわずかに2本である。西木群も東木群と同様に主木が主体となっており，東西両木群はその構成が強固のように観察できる。一方，南木群は，その木数において副木(9本)が上回っており，主木はわずかに2本である。同様のことは北木群についても言え，主木2本，副木11本である。

各木材について観察すると，主木はほとんど二次加工が加えられており，半裁されたり，先端が尖って杭状に作られたり，六角などの面取りも行れているものもある。これに比べて副木は，伐採されたままのものが多い。

なお，この木組遺構の中央には若干の砂が認められ，他の地区と様子を異にしているが，その下部



第10図　木組遺構

には何の施設も検出できず，少くとも掘りぬき井戸とは考えられない。

第4節　その他の遺構

第3次調査において設定した各トレンチの断面観察を行うと常に，その層位が土墨の西麓付近に向って傾いていることに気付くのであるが，はたしてこれは何を示しているのかという疑問がわいてくるのである。ここではこれを一括して取扱うこととする。しかし，その調査地区がプール工事地点のみという制約が大きく十分な結論には至っていないことをはじめにおことわりをしておきたい。以下，各トレンチの所見について述べて行くことにする（第11・12図)。

1．第1トレンチ拡張区

プール用敷地造成地の最南端に当るため西側は攪乱され十分把握できなかったが，東から西への層位の傾斜を観察することができる。これらはベルト状に堆積しており，特に第4層は各トレンチに共通しており鍵層ともいえる。また，集石などもこの層より下位層には含まれていない。これらと同様の傾斜は第1号集石遺構のB－B′断面図の中でも観察することが可能である。

2．第4トレンチ及び拡張区

これについては，第2号集石遺構C－C′断面図で観察したい。ここでは，第2層が第1トレンチ拡張区の第4層に当り，西から東への層位の傾斜を観察することができる。一方，第4トレンチ南壁断面図によれば鍵層は第4b 層であり，細い炭化物ベルトが西より東へと傾斜している。ただ，全体としてみると，このトレンチ内層位は乱れていることもわかる。

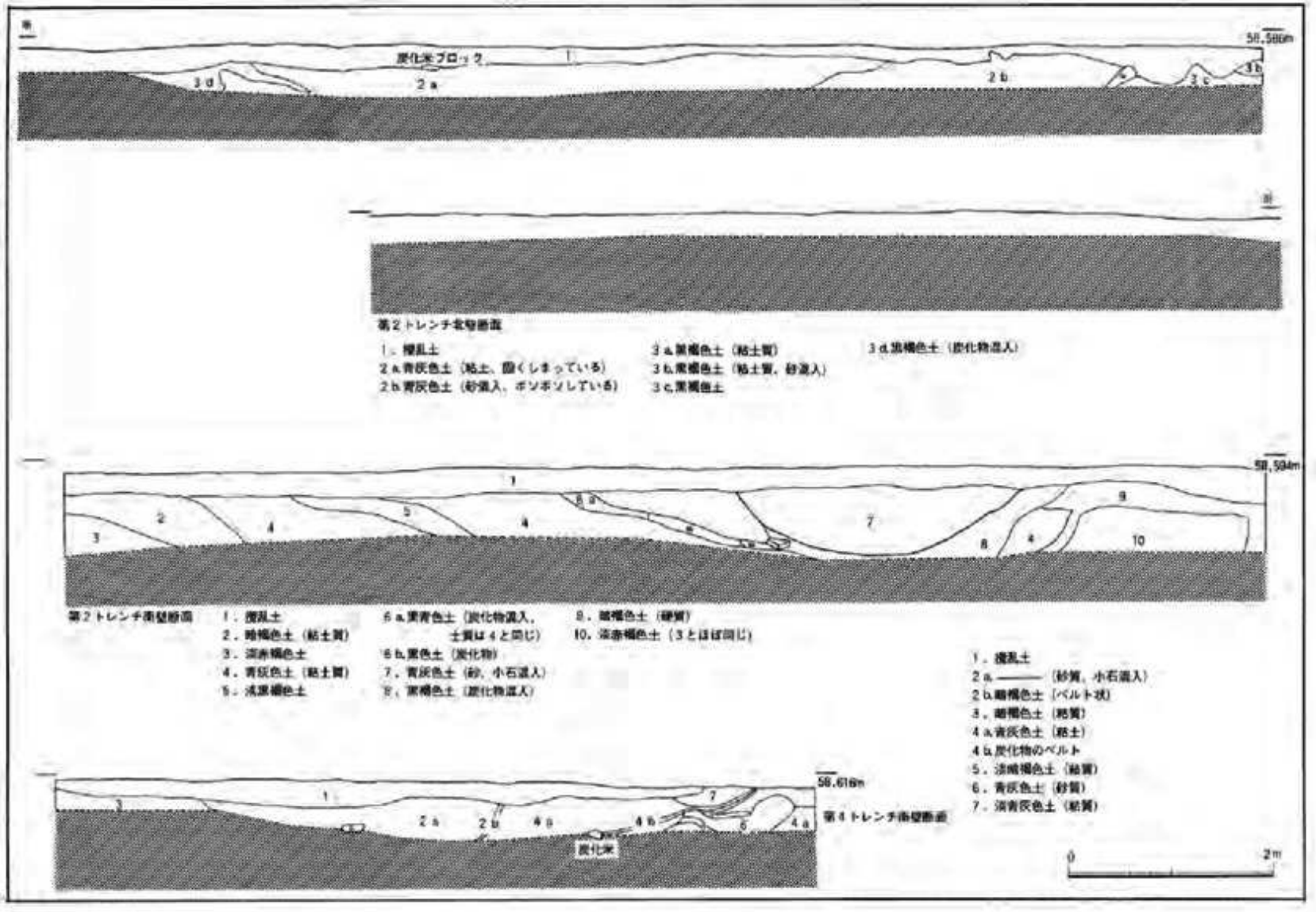
3．第2トレンチ

このトレンチの断面図は南北両面にあるので，観察が容易である。まず，一見してわかることは，南壁の土層は，土墨の麓部付近に向って傾斜していることである。特に東方向でその傾向が著しい。この中での鍵層は，第6a，6b そして8層である。第2号集石はこれら以上の層中に含まれるのである。一方，北壁での鍵層は3d 層であるが，3a，3b，3c の各層もこれに類似している。そして，いずれも中央に向って傾斜している。しかし，この両壁の鍵層は必ずしも同一とはいえない。何故ならば，第2トレンチ中央部分で，前者の6a，6b，8層は立ち上ってしまうからである。これは発掘時点でのまぎれもない事実である。よってこの意味では，二つの鍵層は違うものといえる。ただ，本質的（時代的）に異なるのかどうか決しがたいが，炭化物の混入の度合は，南壁の土層の方が多い。なお，南壁断面第7層の上幅は2.78m，深さは70cmである。

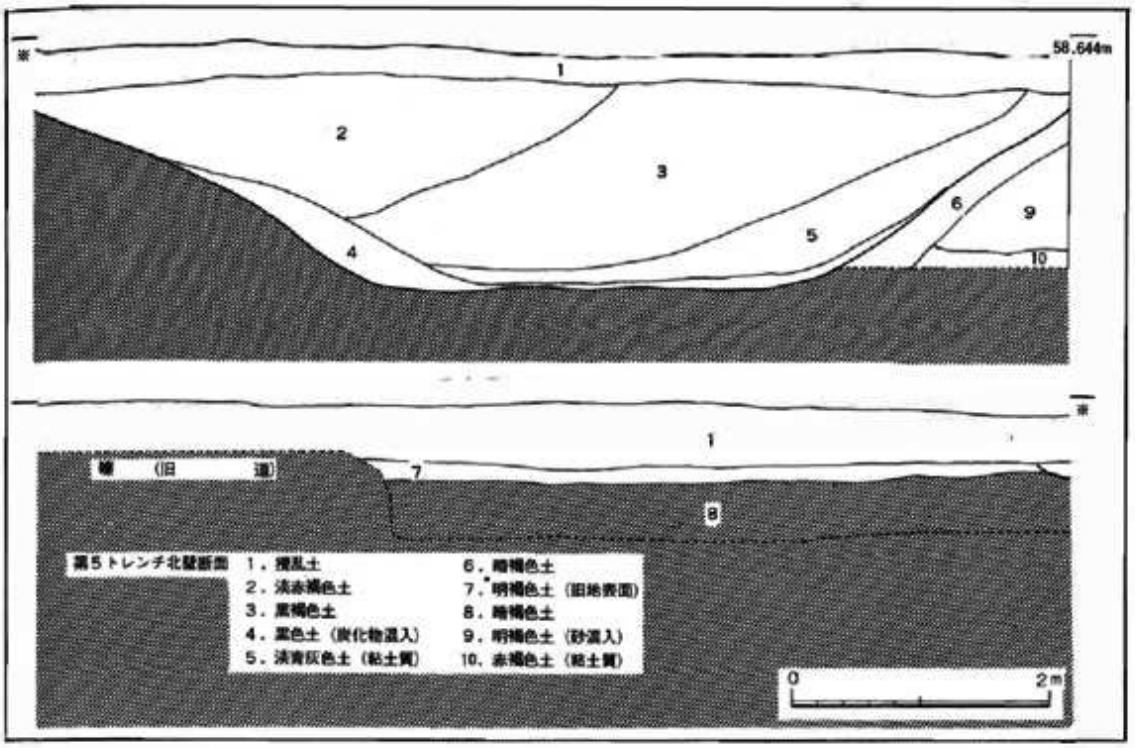
4．第5トレンチ

このトレンチは最大1.9m（階段掘）ほどまで掘り込んだが，北壁断面に示される通り，大きな落ち込みを観察することが出きる。仮に第4層下面を底面と考えれば，上幅8.24m，深さ1.7mを測る。各層は比較的単一土色・土性より成り，自然堆積を思わせるが，第6，9，10層などは人工的盛土と考えられるし，第8層は安定した層で地山とも考えられるが，付近より若干高いのが気になる。

以上，各トレンチについては述べてきたが，ある時点においてこの土墨下には，凹んだ状態で安定していたことは歴然としている。これが、溝や池なのかあるいは他の施設なのかについては速断できないが、この土墨形成前(直前あるいは併行かもしれないが)にこの施設の存在があったことになる。



第11図　トレンチ土層断面図（1）



第12図　トレンチ土層断面図（2）

第Ⅳ章　遺　　物

今回の調査によって出土した遺物は，土製品，石製品，木製品そして金属製品その他である。以下その法量，特性などについての観察所見を述べることにするが，分類はその材質に依っており，機能等については各記述の中で触れることとする。

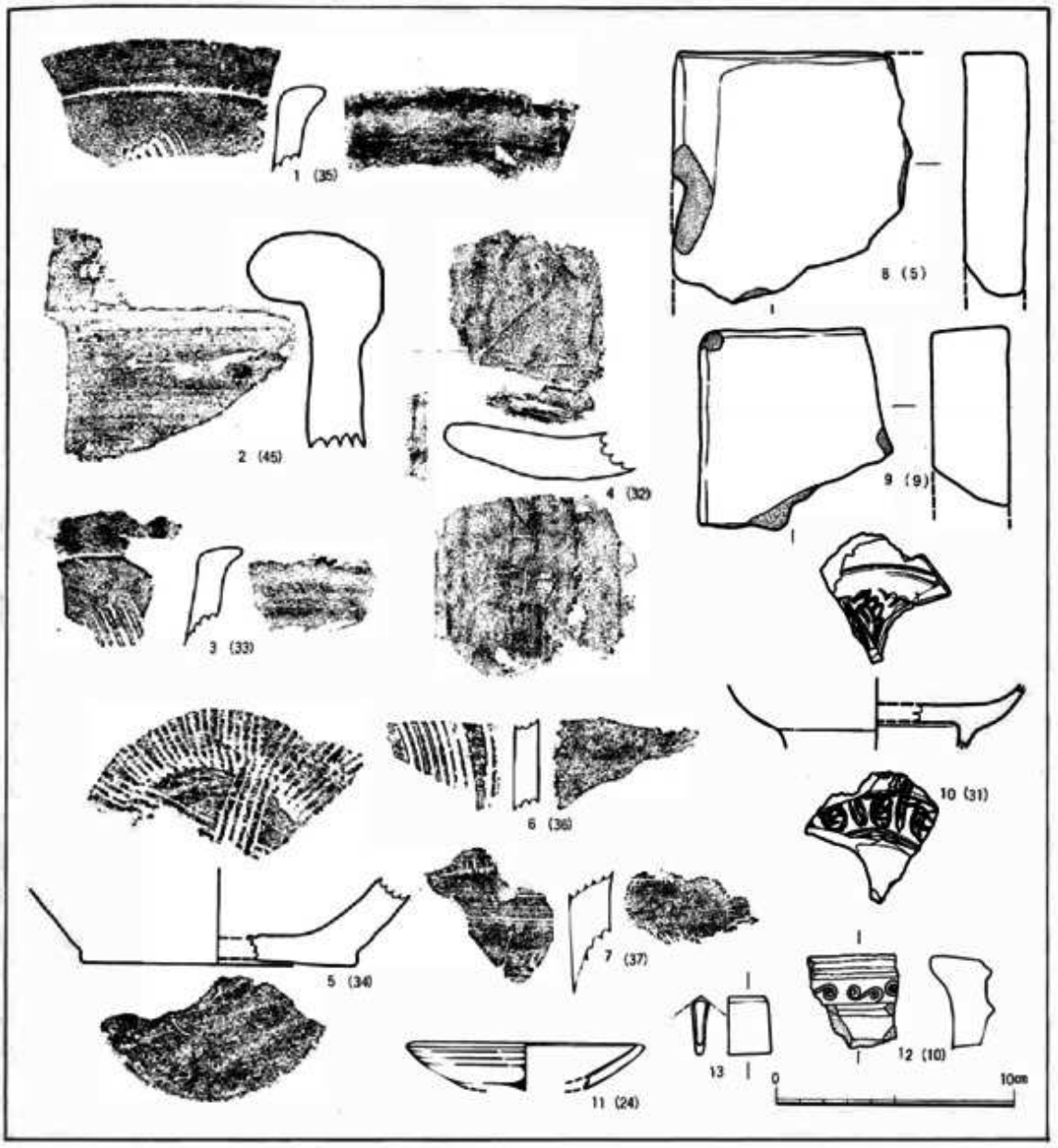
第1節　土　製　品

土製品としては，土器，陶磁器，塼，瓦の破片が出土しているがいずれも小片でありその状況を知ることが困難なものも多い。観察結果については第3表に記入した通りである。

土器としては，土師器や土師質のものが出土し，いずれも杯や炉明皿の一部と思われ糸切り痕をもつ底部などもある。陶磁器としては，釉薬のあるものとないものや，染め付けなども出土しているが特に白磁，青磁も注目される。器形的には，擂鉢，甕，埦（高台付）などが見られる。塼と思われるものは2点出土しているがこの他にも2点ほどの破片がある。しかしこれは瓦の可能性もあり十分判別できない。2点の塼はいずれも角の面取りが成され表面はよくみがかれている。瓦片としては平瓦（いぶしたものといぶしていないもの）がいくつか出土している。

第3表　土製品一覧表

通No	資料No	出土地区遺構	層位	器種・器形	部分	器厚(cm)	色調 外面	色調 内面	観察	図No	写真No
1	21	5トレンチ	1	中世陶器・壺?	胴部	1.2	灰	暗灰	外面ざらざらしている，自然釉か。内面ヨコナデ調整（2cm間隔）		Ⅶ—13
2	22	〃	黒色土	〃・〃?	〃	0.98	黒	黒褐	外面ヨコナデ調整，内面は凸凹，編物付着。		Ⅶ—10
3	3	2号集石	—	〃・〃?	〃	1.6	暗黒褐	暗赤褐	外面炭化物付着，内面ヨコナデ調整。		Ⅶ—8
4	34	〃	—	〃・擂鉢	底部	1.89	暗赤褐	黒褐	外面底部ヨコナデ調整，内面くし目（4本），底部に交叉するようにくし目あり，くし目は下から上へ掻き上げる。	13—5	Ⅶ—7
5	33	〃	—	〃・〃	口縁部	1.13	赤褐	灰褐	軟質のものに近い。	13—3	Ⅶ—9
6	2	〃	—	〃・壺?	胴部	2.05	黄灰	暗灰	内面ヨコナデ調整。		Ⅶ—14
7	27	—	表採	〃	〃	0.9	赤褐	黄褐	信楽焼か，長石・石英？がぶつぶつ吹きだしている。内外面ともにヨコナデ（ヘラ）		
8	13	1トレンチ拡張区	黒色土	〃	〃	1.3	暗赤褐	黒褐			
9	10	1トレンチ	〃	〃・火鉢	口縁部	1.4	黄褐	黒色	口縁に渦巻文，胎土に金雲母。	13—12	Ⅶ—6
10	14	2トレンチ	3褐色土	中世陶器か？	胴部	1.4	黒灰	黒灰			
11	16	〃	2青粘土	〃・鉢か	底部	1.0	黒	赤褐	胴部最下部にヘラでおさえたあとがある。		
12	19	5トレンチ	1	〃	胴部	1.35	赤褐	暗赤褐			
13	4	2号集石	黒色下粘土	?・壺	〃	1.08	暗灰	〃			Ⅶ—12
14	15	2トレンチ	2青粘土	軟質陶器	口縁部	0.42	黄灰	黄灰	器種不明。時代不明。		
15	17	〃	〃	〃	底部	0.6	暗黄褐	黄褐	〃　〃		
16	20	5トレンチ	1	〃・火鉢	口縁部	0.85	黒	黒			
17	35	2号集石	—	〃・擂鉢	〃	1.15	〃	〃	このごろ東北各地で出土している。くし目（6本）	13—1	Ⅶ—5
18	36	1トレンチ	3黒色土	〃・〃	胴部	1.09	〃	〃	33，35と同じ。	13—6	Ⅶ—11
19	40	1トレンチ拡張区	黒色土	土師質陶器?	〃	0.8	褐	暗黒褐			
20	11	〃	〃	〃	〃	0.6	黄褐	黄褐			
21	42	〃	〃	〃	〃	0.45	暗褐	黒褐	軟質土器。？年代不明。古代の土師器とは異なる。		Ⅶ—15
22	41	〃	〃	〃	〃	0.6	明灰	明灰			
23	38	〃	2	〃	〃	0.95	赤褐	赤褐			
24	7	1トレンチ	3黒色土	〃	底部	1.0	明赤灰	乳灰	軟質土器(?)は，No10—40,11,42,41,38共通する。灯明皿か。		
25	8	〃	黒色土	〃	口縁部	0.3	褐	明褐			
26	24	5トレンチ	〃	白磁・杯	〃	0.45	白	白	表面に灰色の斑点あり，口径9.6cm。ロクロ，中国製。	13—11	Ⅶ—2
27	12	1トレンチ拡張区	2黒色土	青磁	〃	0.55	緑灰	灰	火をうけたのか変色している。		
28	31	2号集石	黒色土の下粘土	染付	底部	0.4	明灰色に青の文様	明灰色に青の文様	明代	13—10	Ⅶ—1
29	5	〃	—	瓦・塼	〃	2.75	暗灰	灰	面取りがされてある。表面はよくみがかれている。	13—8	Ⅶ—3
30	9	1トレンチ	2	〃・〃	〃	3.25	黒灰	黒		13—9	Ⅶ—4
31	37	5トレンチ	2黒色土	〃	胴部	1.8	灰	灰	近世以前か。細かな布目が施こされている。いぶしている？	13—7	Ⅶ—18
32	18	4トレンチ2号集石	褐色土	〃	口縁部	1.72	黒灰	黒灰	近世以降の瓦か。？		Ⅶ—16
33	32	2号集石	—	〃・丸瓦	〃	1.9	黄灰	黄灰	37よりは古そうである？	13—4	Ⅶ—19
34	25	—	表採	〃・平	〃	1.95	黒灰	黒灰	いぶしている		
35	26	—	〃	〃・〃	〃	2.0	〃	〃	近世以降の瓦か。　〃		
36	43	—	〃	〃・〃	胴部	2.0	黒	黒	〃		
37	44	—	〃	〃	〃	2.0	明黄褐	黄褐	近世以前。25～43のような瓦が焼けたものと思われる。		Ⅶ—17
38	6	1トレンチ拡張区	2粘土	〃	〃	1.85	明黒褐	明褐	瓦か？		
39	39	1号集石	—	〃	口縁部	2.25	灰	暗灰	遺物No3，瓦。32とよく似ている。		
40	1	1トレンチ1号集石	埋土	〃	胴部	1.8	褐	暗褐	瓦か。32・39のような瓦が焼けたものか。		
41	45	—	表採	陶器・火鉢	口縁部	2.3	黒褐	暗黒褐	不明。雲母が沢山入っている。	13—2	
42	30	—	〃		胴部	1.18	灰褐	灰褐	不明。		
43		土蔵付近	〃	染付	口縁部		白青の文様	白	器層がうすい。明治以降。		



第13図　土製品・金属製品　（ ）内は資料No.　13：鐵

第2節　石　製　品

今回の遺物の中で数的に特色づけるとすれば，この石製品である。各集石遺構より出土したものが主であるがいずれも廃棄された様子を示し，火を受けているものが多い。

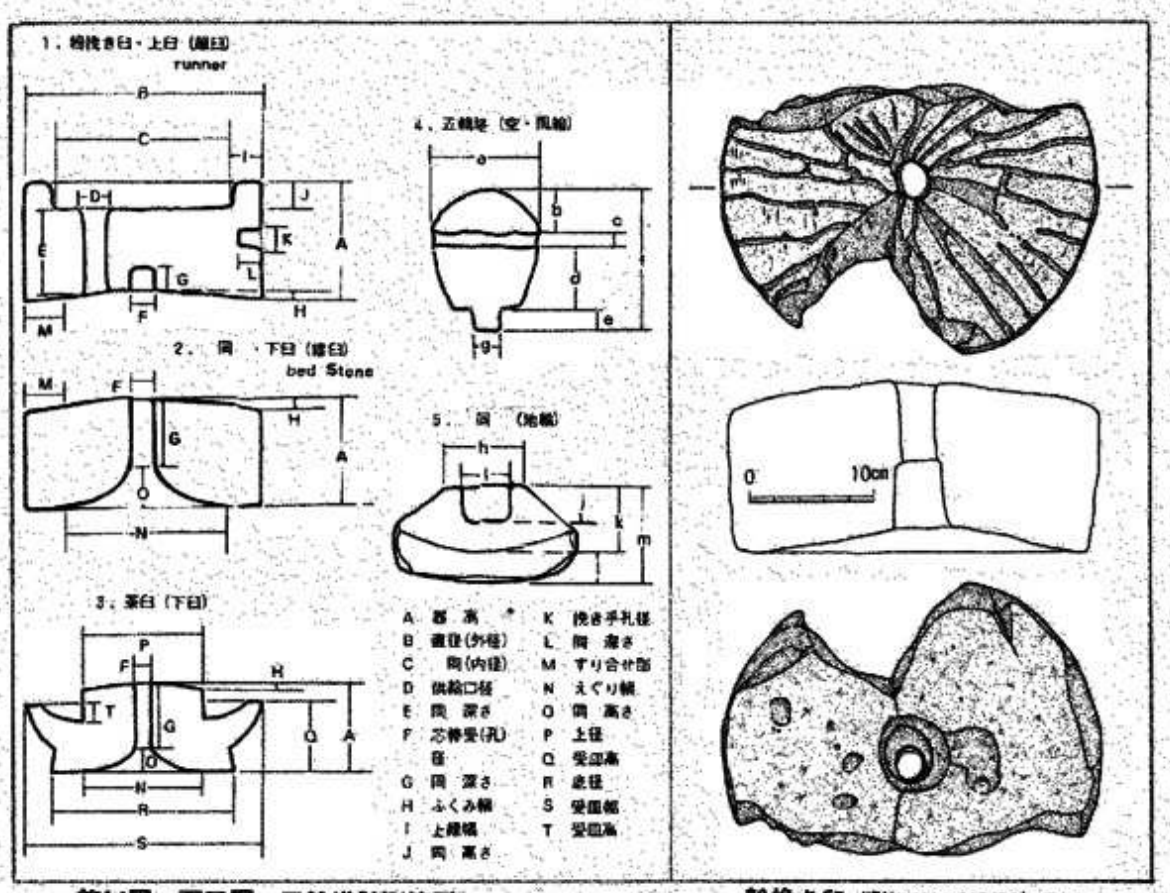
器種別にすると，粉挽き臼，茶臼，五輪塔，墓碑，磨石となるが,粉挽き臼が最も多く22点(21個体)を数え，以下順に２点，１点，２点，１点となる。石臼類の概要については第４表に示している。

第4表　石臼類一覧表

（単位：cm）

通No	資料No	地区 遺構	種別 名称	種別 部分	器高	直径 外径	直径 内径	供給口径	芯棒孔(受)径 直径	芯棒孔(受)径 長さ(深さ)	ふくみ幅	えぐり 幅	えぐり 高さ	えぐり 角度(度)	目 区画	目 溝数(本)	目 形	目 幅	目 深さ	回転方向	上縁 幅	上縁 高さ	挽き木孔 径	挽き木孔 深さ	重量(kg)	備考	図番号	写真番号
1	5	第2次 土層下	粉挽き臼	下臼	14.0	38.4	—	—	1.7	9.1	1.7 (36.2)	31	2.4/5.7	19/53	放射状	8	U	1.2	0.15	—	—	—	—	—	5.0		17-3	
2	6	第2次 第1号集石	＊	下臼	14.1	42	—	—	—	—	0.5 (40.4)	32.2	1.7	12	＊	8	＊	0.8	0.1	—	—	—	—	—	3.5		15-10	
3	7	＊	＊	下臼	13.8	27.6	—	—	—	—	1.7 (24.8)	23	1.4	17.5	＊	2	＊	0.5	0.1	—	—	—	—	—	1.0		15-3	
4	8	第2次 土層下	＊	上臼	欠損	32.0	20.4	4.3	3.9	2.6	1.1 (24)	—	—	—	＊	11	＊	0.6	0.2	左	欠損	欠損	2.2	欠損している 2.3	5.2		15-4	
5	9	第2次 第1号集石	＊	上臼	14.5	29.2	19.2	—	2.3	3.4	1.8 (20)	—	—	—	＊	13	＊	0.3	0.1	右？	2.5	2.9	2.4	4.4	6.0		16-1	図—21
6	10	＊	＊	上臼	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	＊	7	＊	0.5	0.25	—	—	—	—	—	0.7		15-5	
7	13	＊ (No2)	＊	下臼	14.0	34.8 (30.8)	—	—	—	—	1.4 (34.8)	26.2	1.7/3.5	23/56.5	＊	3	＊	0.6	0.1	—	—	—	—	—	1.8		15-9	
8[6]	14	＊	＊	下臼	13.5	30.1	—	—	上2.9 下3.5	上6.1 下5.4 11.3	2.6 (29.3)	25.6	2.0	11.5	—	22	V	0.5	0.3	—	—	—	—	—	4.5		15-6	
9	22	＊	＊	下臼	12.8	24.6	—	—	—	—	0.9 (20.6)	ほぼたいらである			放射状	6	＊	0.6	0.25	—	—	—	—	—	1.8	薄石 安山岩	15-11	
10	25	＊	＊	下臼	13.3	31.0	—	—	—	—	0.6 (29.6)	18.6	1.0	25.5	＊	4	U	0.7	0.2	右？	—	—	—	—	1.5		15-12	
11	26	第2次 土層下	＊	下臼	11.5	26	—	—	—	—	4.5 (24)	20.6	0.6	13.5	＊	2	V	0.6	0.25	—	—	—	—	—	0.5		15-2	
12	2	第3次 第1号集石	＊	下臼	10.9	21.6	—	—	2.4	15.9	1.0 (18.6)	21.6	0.6/4.4	7/66	＊	7	＊	0.5	0.2	—	—	—	—	—	2.5	凝灰岩か	17-6	
13	4	＊	＊	下臼	19.9	29.2	—	—	2.9	6.0	0.8 (28.4)	18.8	0.7/3.2	16/43	＊	11	U	0.98	0.25	—	—	—	—	—	4.3		17-4	
14	15	＊	＊	下臼	10.9	25.6	—	—	2.3	3.4	1.3 (24.8)	21	1.0/3.0/3.5	11.5/35.5/74.5	＊	10	＊	0.6	0.2	—	—	—	—	—	3.5		17-2	
15	17	＊	＊	上臼	14.6	36.0	24.6	3.6	2.1	1.5/4.6 6.1	1.5 (31.4)	—	—	—	＊	17	＊	0.6	0.4	左	3.6	3.0	タテ1.9 ヨコ2.5	2.8	9.0		17-1	図—1
16	30	＊	＊	上臼	14.4	29.0	18.2	タテ2.6 ヨコ2.3	3.0	2.1	1.8 (23.4)	—	—	—	＊	26	V	0.7	0.2	左	5.3	3.3	タテ2.5 ヨコ2.2 1.9 2.5	4/4	13.5	挽き木孔2つ残り	15-1	図—4
17	1	第3次 第2号集石	茶臼	下臼	8.8	—	—	—	—	—	—	—	1.0	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.0		16-6	図—2
18	3	＊	粉挽き臼	上臼	15.7	31.0	17.8	3.2	—	—	1.3 (31.0)	—	—	—	放射状	4	V	0.5	0.2	右？	3.5	2.5	—	—	1.8		16-8	
19	12	＊	＊	下臼	12.2	26.6	—	—	1.3	4.0	0.6 (26.0)	19.6	1.5/6.7	11.5/64	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.9		16-5	
20	16	＊	＊	下臼	10.3	29.4	—	—	2.2	10.3	2.85 (31.6)	24.2	11.0	24.5	放射状	17	U	0.5	0.15	—	—	—	—	—	5.7		16-2	図—23
21	18	＊	＊	上臼	—	27.6	20.0	—	—	—	3.3 (24.6)	—	—	—	＊	7	U	0.6	0.3	右？	—	—	—	—	3.4		16-4	
22	27	＊ (No3)	茶臼	下臼	11.7	34.8	23.0	—	2.8	10	0.3 (17.2)	16.4	1.6/0.8	11.5/53.5	—	—	—	—	—	—	底径——28.8 皿の高さ——6.7				4.0		16-3	図—3
23	11	二ノ丸表採	粉挽き臼	下臼	13.5	30.1	—	—	上2.9 下3.5	上6.1 下5.4 11.3	2.6 (29.3)	25.6	2.0	11.5	—	22	V	0.5	0.3	—	—	—	—	—	6.0		15-8	図—22
24	29	＊	＊	下臼	9.9	40.2	—	—	—	—	1.5 (38.6)	36.2	1.0	9	放射状	2	＊	0.6	0.2	—	—	—	—	—	0.8		15-7	

※1．芯棒孔やえぐりに段がつく場合は，数字も数段に分けてある。　※2．えぐりの角度も同様に分けてある。　※3．ふくみ幅の（　）内の数字はふくみの底径を示している。
※4．資料No.11と14は同一個体。　※5．各項目は主に「三輪：1979」による。



第14図　石臼類・五輪塔計測箇所　　粉挽き臼（資料No11とNo14の接合）下臼

1．粉挽き臼

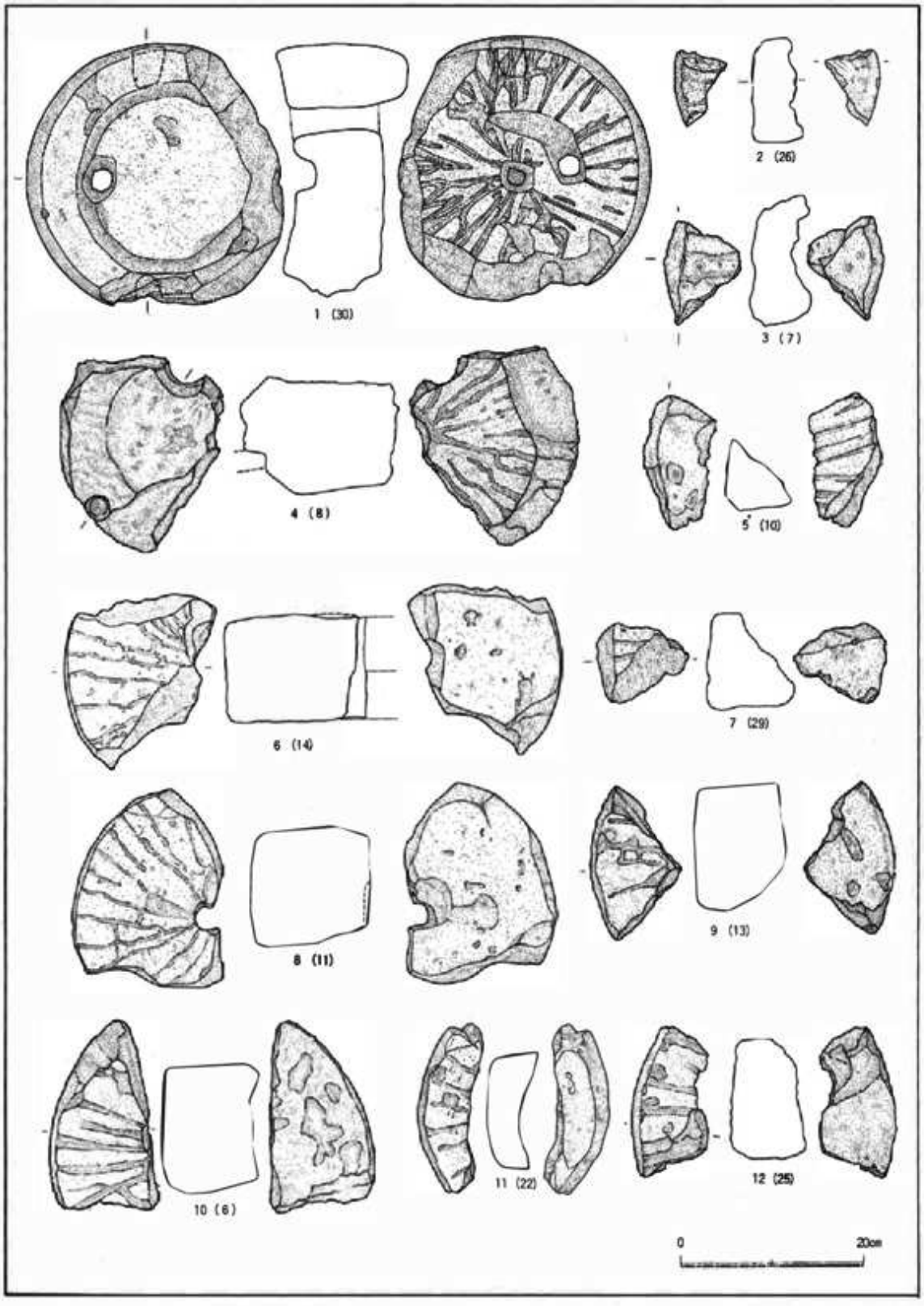
完形品は1点もなくいずれも破片であるが，火を受けたものもあり放棄時の様子がうかがえる。上臼が7点，下臼が15点であり，前者の平均器高は約14.8cm，平均直径は約30.8cm，後者のそれは，約12.9cm，約30.5cmである。各の磨り合せ部はよく磨滅しており使用度の高さを物語る。上臼には，芯棒受けが貫通孔と盲孔のものの2種があり挽き手孔を2つ持つ特例もある。底面には物くばりがあり主として左回転であることがわかる。下臼は，えぐりの大小や芯棒孔の形態によって分類することが可能である。前者ではえぐりのほとんどないものと器高の3分の1以上をえぐっているものがあり，後者では，円柱状のものと階段状に上部が狭くなるものがある。また上下臼共にふくみの大小によって区分することもできる。石質は安山岩が多い。

2．茶　臼

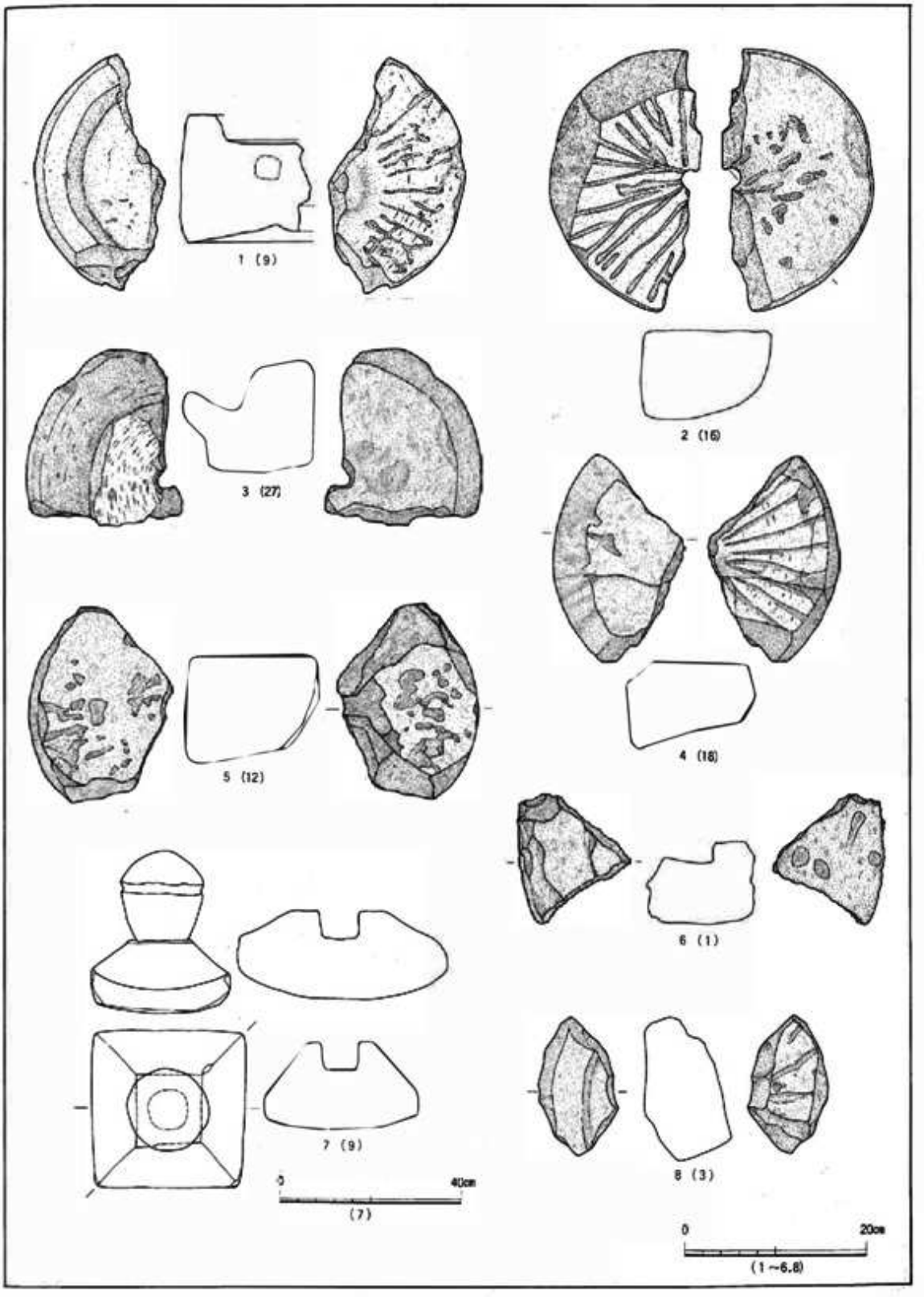
これは，2点出土しておりいずれも下臼で受皿部が明確に残っている。梁川城出土茶臼での発表例としては3点目となるが，最近の町教育委員会の調査でも出土しているようである。磨り合せ部はよく磨滅し目が確認できない。

3．五　輪　塔

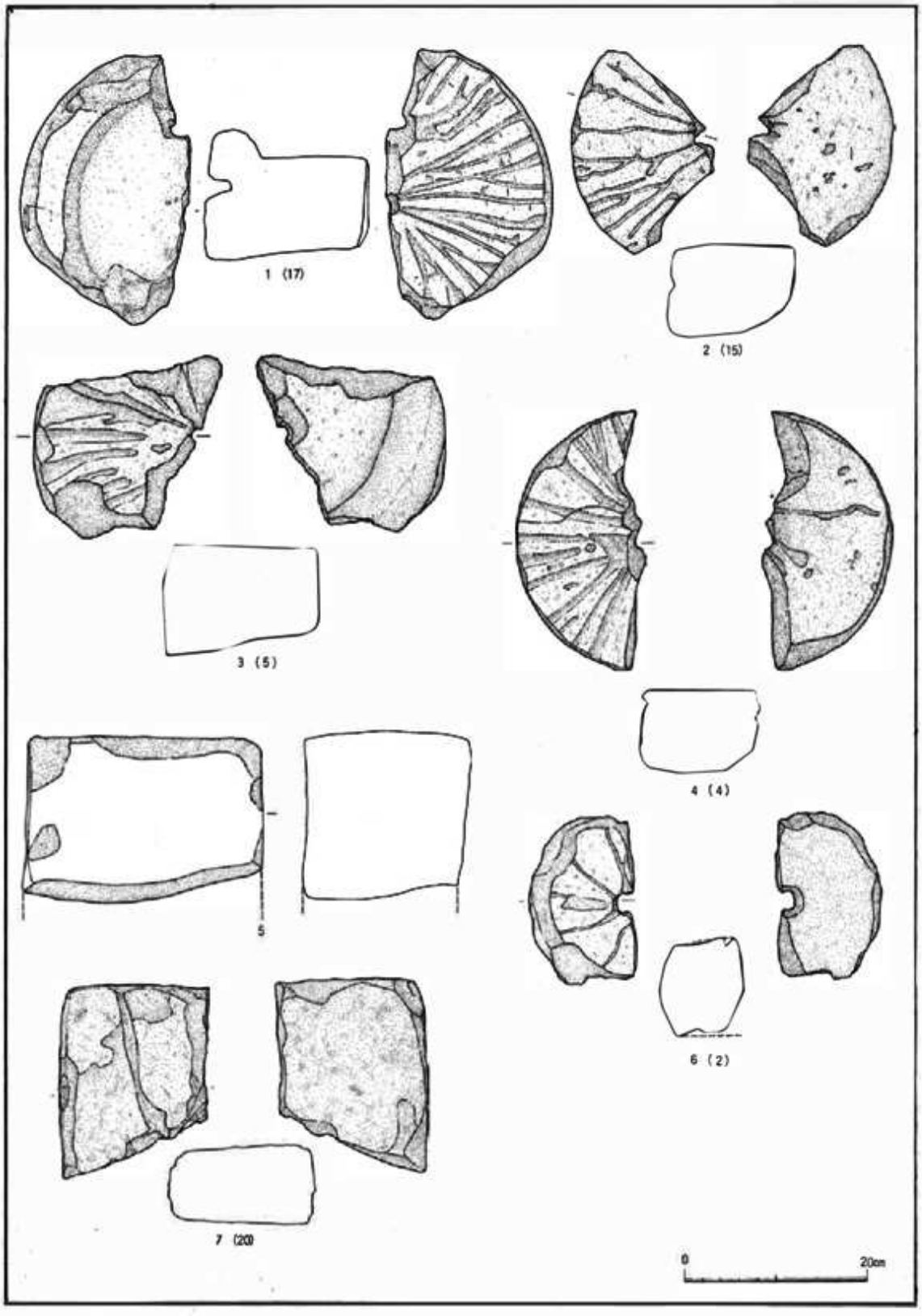
空・風輪と火輪が約2mの間隔で発見された。空・風輪は分離しておらず，火輪の凹みにさし込むように作られている。全体高さ35.7cm，幅34.5×34.0cmであり，第14図のa～mはそれぞれ，18.4cm，



第15図　石製品（1）　石臼類の断面図は1を除き、上が上面である（ ）内は資料No.



第16図　石製品 (2)



第17図　石製品 (3)

7.5cm, 2.3cm, 9.9cm, 3.9cm, 23.6cm, 4.4cm, 15.1cm, 8.7cm, 6.3cm, 10.8cm, 5.2cm, 16cmを測る。石質は凝灰岩であろう。

4．墓　碑

第17図5は長軸18.2cm，短軸26.0cm，厚さ18.3cm，7のそれは21.2cm，16.3cm，8.7cmを測り墓碑と思われ片面にはのみ痕がある。凝灰岩製品。

第3節　木製品・その他

1．木製品

木製の遺物は，第1号集石遺構，第2号集石遺構そして木組遺構より出土しているが，最も多数出土したのは木組遺構である。その法量などは第5表に示した通りである。

第1号集石の木材は，その様子から見て人工品ではなく土砂の積上げ時に埋まったものと考えられる。また，第2号集石出土のそれは小形で刀子状を呈し他と異なっている。

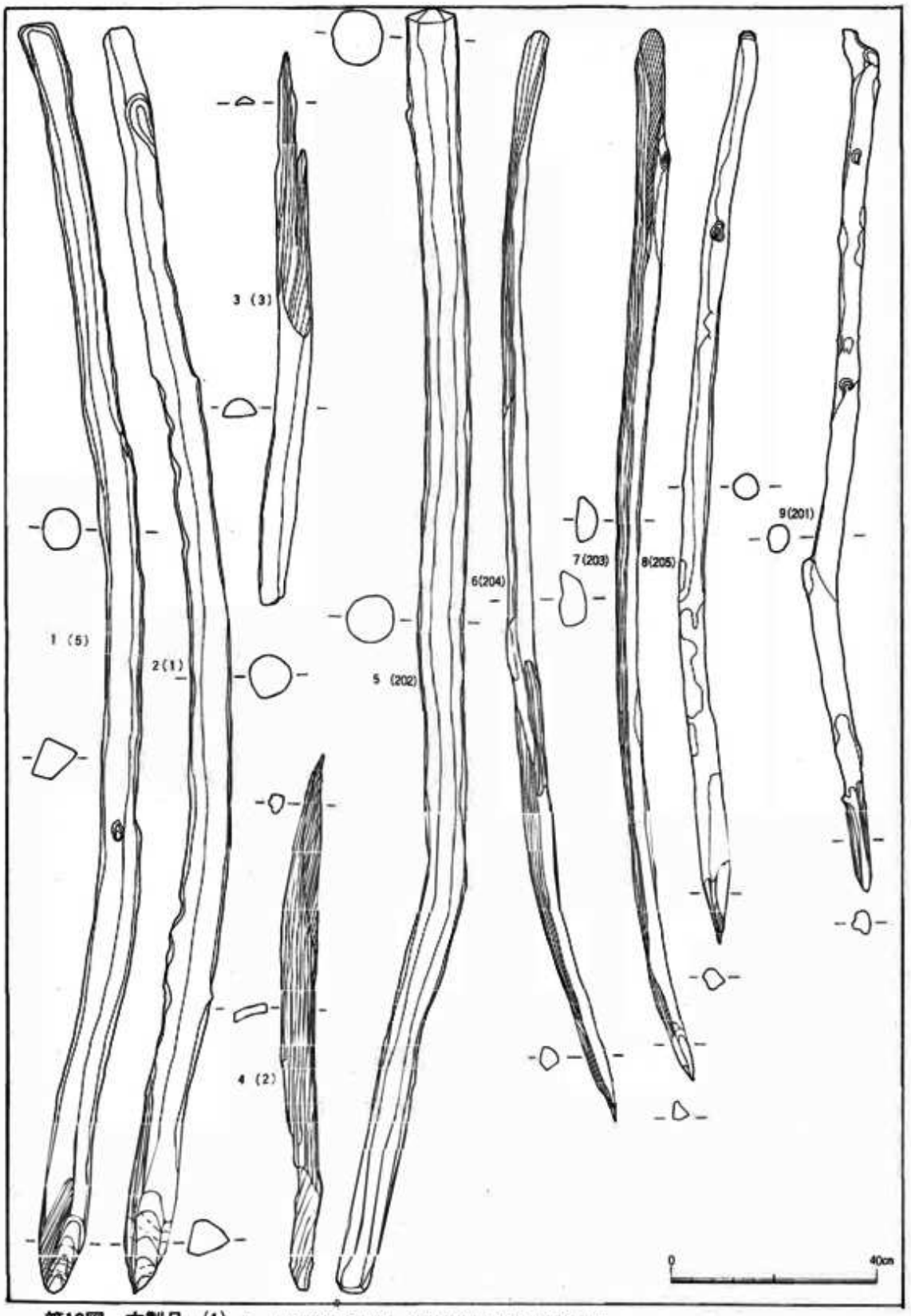
木組遺構内出土の木材は先端を杭状に尖らせたものや両端を多角形に面取りしたものに大別される。その切り口（削り口）はいかにも鋭利であり，刃部のすぐれた刀物で加工されたことを知りうる。この他に小枝様の多数の木（副木）が共伴していることは既述の通りである。なお，表に掲げたものは実測図を作成した資料（主木が中心）に限られている。

第5表　木製品一覧表

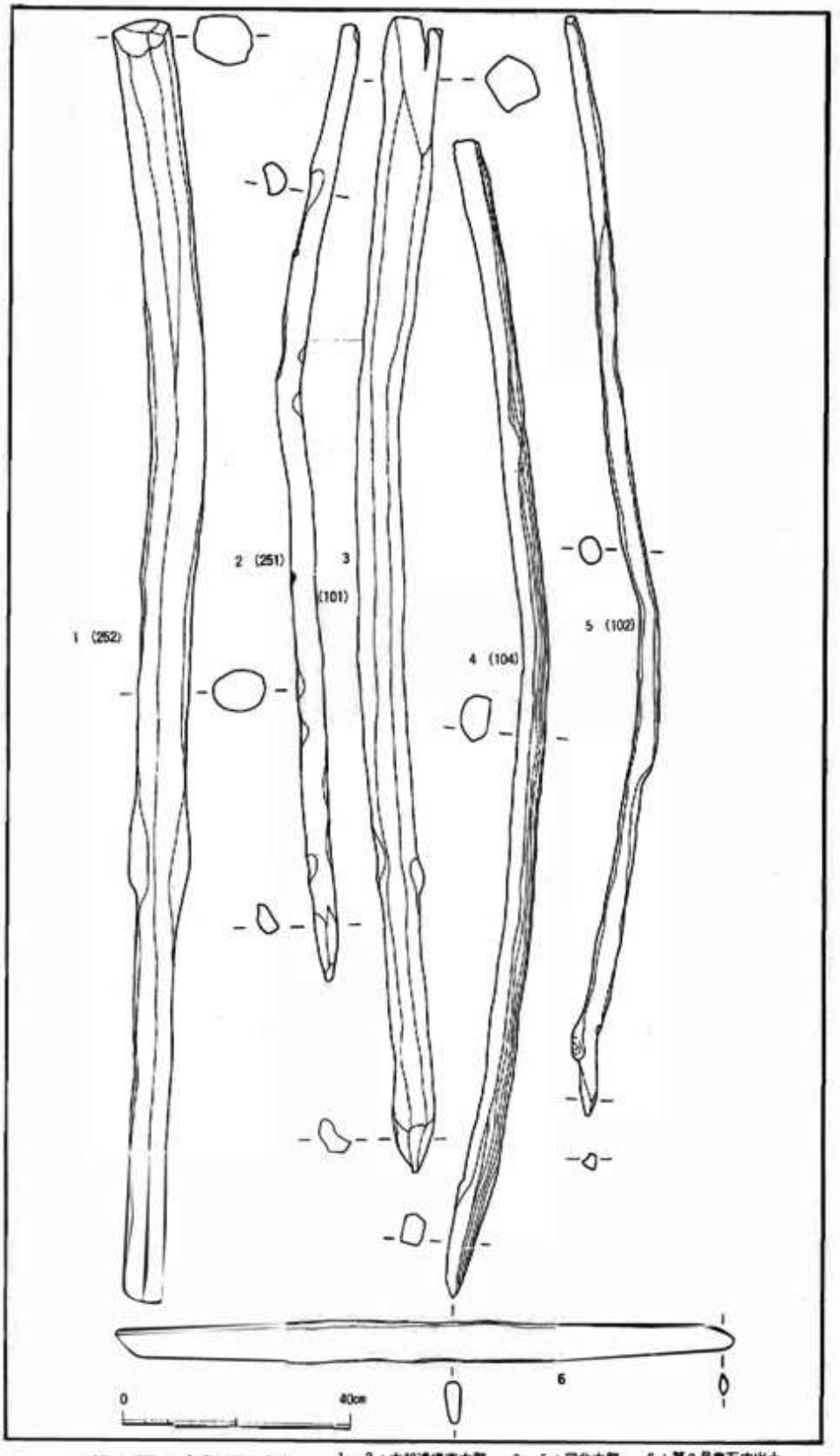
番号	地　区	遺　構	遺物番号	法量(cm) 長さ	法量(cm) 幅	材　質	図番号	備　考
1	—	第1号集石	—	72.0	9.0	—	—	第2次調査
2	4トレ拡	第2号集石	1	108.8	7.4	—	19—6	第3次調査（以下同じ）
3	〃	木組遺構	5	247.2	9.0	—	18—1	東木群　杭状　落葉樹か？
4	〃	〃	1	246.4	9.8	—	18—2	〃　〃　〃
5	〃	〃	3	107.6	6.8	—	18—3	〃　半裁木　〃
6	〃	〃	2	104.4	7.1	—	18—4	〃　〃　〃
7	〃	〃	202	250.4	10.4	—	18—5	西木群　〃
8	〃	〃	204	212.4	10.8	—	18—6	〃　半裁木　〃
9	〃	〃	203	204.8	9.8	—	18—7	〃　〃　杭状　〃
10	〃	〃	205	176.6	6.1	—	18—8	〃　〃　〃
11	〃	〃	201	167.6	7.0	—	18—9	〃　〃　〃
12	〃	〃	252	225.2	10.7	—	19—1	南木群　〃
13	〃	〃	251	168.4	4.7	—	19—2	〃　杭状　〃
14	〃	〃	101	202.8	9.9	—	19—3	北木群　〃　〃
15	〃	〃	104	203.2	8.0	—	19—4	〃　〃　〃
16	〃	〃	102	193.2	4.3	—	19—5	〃　〃　〃

2．金属製品・その他

金属製品としては，短刀の鉏（はばき）が1点，第3トレンチの黒色土層中より出土した。その法量は，高さ2.35cm，幅1.8cm，厚さ0.75cmで，金属の厚さは0.1～0.4cmを測る。出土時は黄色であったが現在は赤褐色に変色している。また第6トレンチ黒色土より永楽通宝が出土している。この他，各トレンチ内より炭化穀物（粃あるいは麦）がベルト状に出土している。



第18図　木製品 (1) 1～4：木組遺構東木群　5～9：木組遺構西木群（ 内は資料No.



第19図　木製品 (2)　1～2：木組遺構南木群　3～5：同北木群　6：第2号集石内出土

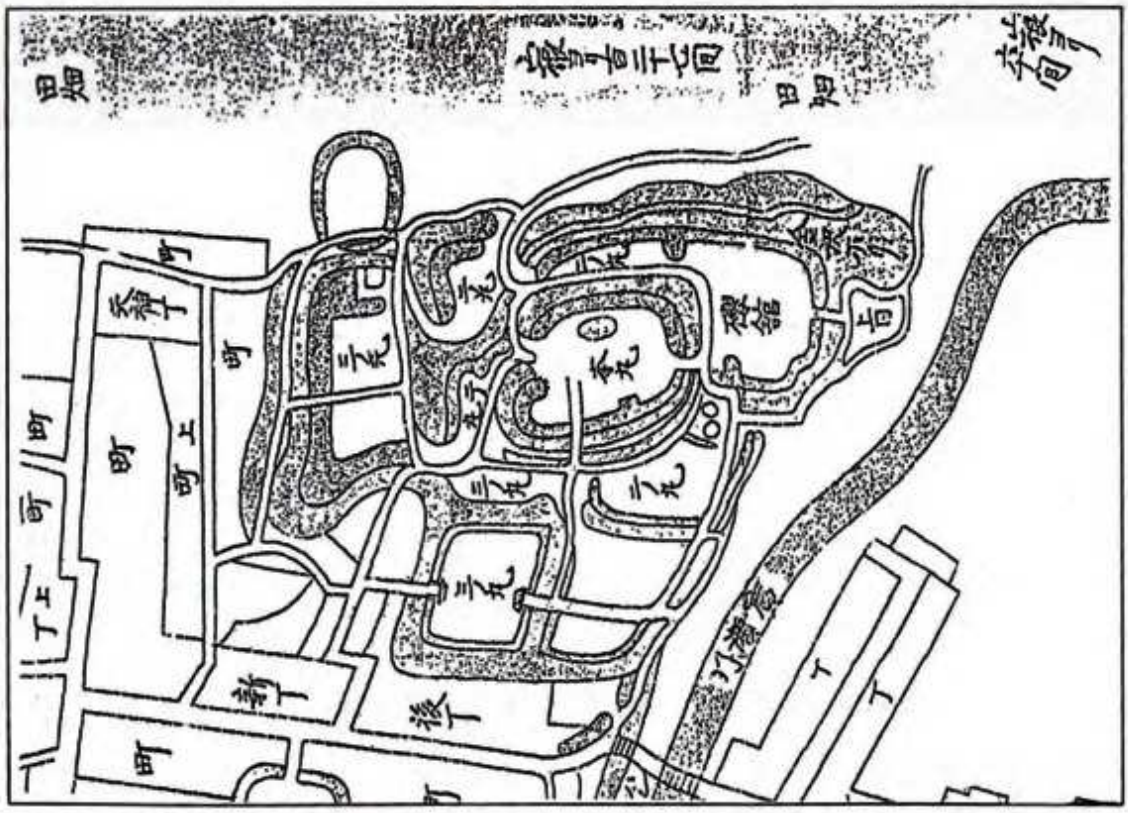
第V章　総　　括

梁川城跡二ノ丸土塁の発掘調査所見を述べて来たが，ここではこれらをまとめる形で総括する。まず，遺物・遺構の諸事象について述べ次にこれらにより生ずる遺跡のあり方についても触れておくことにする。

第1節　遺物・遺構について

今回の調査によって出土した遺物は，土製品（土師質陶器？，陶器，軟質の陶器，白磁，青磁，染付，塼，瓦），石製品（粉挽き臼，茶臼，石塔，石碑），木製品（杭，上下端に面取りのある木材など），金属製品（鎹，古銭）そして炭化穀物である。特に注目されるものは中国の白磁，染付（明代），多数の石臼類，石塔そして鎹などであろう。出土遺物は主として中世のものと考えられるが，一部に近世以降と思われる瓦などもあり現段階では結論づけられない資料もある。石塔は町内各地より発見されるものに類似し15～16世紀のものと考えられよう。

さて，遺構としての土塁であるが，梁川高校々舎建設時に若干削平された可能性が考えられておりもしそうならば現状より以上に大規模であったと考えられる。ただ今回の調査によっては十分確認で

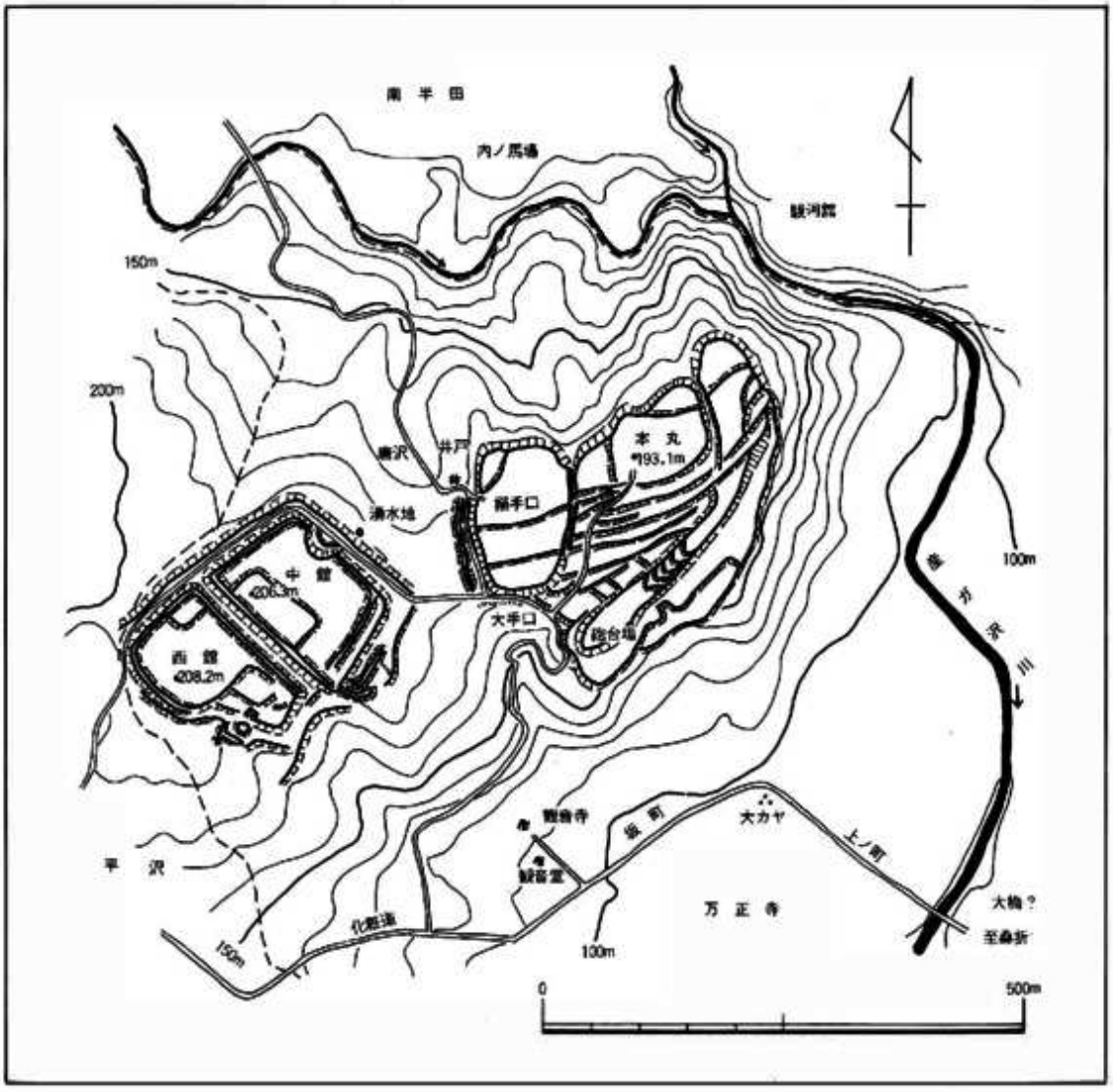

田畑
田畑
町
町
町

きなかった。一方，集石及び木組遺構などの地下遺構は，現土塁の西屑部の直下に位置しており本土塁形成以前に存在したと考えるのが妥当である。しかし，これらはいずれも凹状の遺構が埋められる過程（これが即ち土塁形成時とも考えられる）の中で作られたものであり，第５トレンチ断面図はよくそれを示している。基本的には，(Ⅰ)凹状の施設が存在し（これが土塁形成のためのものという考えもできる），(Ⅱ)その後に土塁が積み上げられるわけであるが，(Ⅰ)の段階の中に木組遺構→集石遺構という順序が考えられる。集石遺構相互の前後関係は一応考えられず同一期の廃棄と思われる。
これらの関係を図式で示せば以下の様になる。

凹状の遺構 ≦ 木組遺構 → 集石遺構 ≦ 土塁形成

(旧) ……→ (新)

さて，集石遺構の性格であるが，第１号には暗渠という考え方もあるが第２号の場合は当らない。第１号にしても今回の調査の中からは断定できず，むしろ放棄物と思われる。また木組遺構は明らか



第21図　西山城跡復元図　（菊池利雄 原図・一部は日本城郭大系３所収）

に井桁状を志向しているが井戸ではなく，むしろ湧水地点などにおける足場のようなものであったと考えられるが類例があれば御教示願いたい。

第2節　遺跡について

今回の調査は二ノ丸土塁の一部分であり，梁川城全体の構成について述べるほどの発掘所見はないが，すくなくともこの土塁は戦国期以降に築造されたことを知ることができるのである。

一方，整理作業段階で航空写真を検討したところ，北三ノ丸の東方に二ケ所の郭状施設を発見した。その一つは既に馬出部と呼ばれ絵図等よりも読みとれるものであるが，他の一つは明らかに一つの郭と考えられる新知見であった。そこで当梁川城の地籌図による復元に取り組んでいた菊池利雄氏にお話をし，これらの部分の検討をお願いした結果が第4図である。この新発見の郭は年代的には新しい時期の造出と考えられるが，いずれ菊池氏の考察が発表されることであろう。この他本城の年代的変遷（中世→近世）の明確化という課題もあるが，これらについては町教育委員会による本丸跡の調査所見及び郷土史研究会の今後の研究に待つこととしたい。

さて，梁川城関連の城として西山城，大仏城，大森城，松前城などがありその図面等も若干掲載したがこれら諸城の研究も併行して成されれば当城の位置もより明瞭となろう。特に，茶臼館や西山城，そして関連諸城館跡の考察が今後積極的に進められるように期待し，また，本調査に関係した多くの方々に感謝を申し上げて本報告を終えたい。

（稿了1981.1.10）

資　料　　梁川城関係略年表

1189（文治5）年	中村朝宗，源頼朝の奥州征伐に子息らが参陣，戦功により伊達郡を賜わり伊達氏と改める。
13世紀初期	伊達義広，栗野大館を築き，亀岡八幡宮を城辺に移すという。
1337（建武4）年	伊達行朝，北畠顕家に従って出陣。(この頃梁川城主は伊達六郎正広といわれる。？)
1426（応永33）年	伊達持宗梁川城に住し，亀ケ岡八幡宮を造営する。
1441（嘉吉1）年	伊達持宗，輪王寺を梁川（現上町）に建立する。
1448（長享2）年	奥州探題大崎義兼，伊達成宗を頼り，梁川に亡命する。
1518（永正15）年	11月，願神軒存奏，伊達稙宗の使者として，梁川より京都に出立する。
1522（大永2）年	伊達稙宗，奥州守護職に補任さる。
1532（天文1）年	伊達稙宗，梁川城より，桑折西山城に移る。 （その後，梁川城主は伊達宗清，桜館に梅津備前住す。？）
1542（天文11）年	伊達氏の内紛，天文の乱おこる。
1544（天文13）年	大塚将監梁川城を守る。
1567（永禄10）年	伊達輝宗，亀岡八幡宮を西山より梁川に移す。
1582（天正10）年	伊達政宗，亀岡八幡宮参詣のため梁川城に逗留する。
1591（天正19）年	豊臣秀吉の奥羽仕置により伊達政宗に従い，伊達鉄斎宗清梁川城を去る。
1591（文禄3）年	蒲生喜内，梁川城主（代）となり，梁川村ほか12ケ村13,140石1斗の地を支配す。
1598（慶長3）年	4月，上杉領となり，須田大炊介長義梁川城代となり，20,000石外3,300石同心給分を賜わる。
1600（慶長5）年	伊達政宗，旧領伊達・信夫両郡の回復を図るが、松川の戦で本庄繁長・須田大炊介軍の反撃にあって敗走する。

1615（元和１）年　香坂太郎左衛門宗吉梁川城番。
1633（寛永10）年　山本右近広忠梁川城番。
1633（寛永10）年　４月，河野孫左衛門重久梁川城番。
1643（寛永20）年　須田相模守秀満梁川城代となる。
1664（寛文４）年　５月，上杉氏削封により，須田秀満，幕臣伊奈半左衛門に梁川城をひき渡し，米沢に帰る。梁川城廃城。以後幕領。
1679（延宝７）年　梁川，本田政武福島藩領となる。
1682（天和２）年　梁川再び幕領となる。
1683（天和３）年　尾張藩主徳川光友の三男，松平出雲守義昌梁川藩30,000石に封ぜらる。
1729（享保14）年　５月，松平義真卒し，梁川上知，８月尾張徳川家より，松平通春梁川城に入部。
1730（享保15）年　梁川藩主松平通春尾張家を継ぎ，梁川は上知。
1731（享保16）年　荒川権六郎梁川代官。
1747（延享４）年　井上河内守正経，磐城平藩主となり梁川30,000石を支配。
1755（宝暦５）年　井上正経，遠州浜松城に移封，梁川会津藩預領となる。
1756（宝暦６）年　安藤対馬守信成磐城平藩主となり，飛領梁川を支配。
1778（安永７）年　梁川上知，幕領となる。
1786（天明６）年　水谷祖右衛門梁川陣屋支配。
1796（寛政２）年　再び，平藩安藤信成の支配地となる。
1803（享和３）年　梁川27,000石上知幕領となる。
1807（文化４）年　松前志摩守章広，松前福山より梁川９,000石に国替，梁川旧城へ新たに陣屋を構える。
1822（文政５）年　松前章広，松前に復帰し幕領となる。代官竹内平右エ門梁川陣屋で支配。
1847（弘化４）年　石原清左衛門，梁川陣屋支配。
1849（嘉永２）年　藤方彦市郎，陣屋支配。
1855（安政２）年　荒井清兵衛，梁川陣屋支配。
1856（安政３）年　梁川，松前藩飛領となり，蠣崎重郎右衛門奉行として出向。
1868（明治１）年　７月，戊辰の役，仙台藩士若生文十郎ら梁川に駐留。
1869（明治２）年　６月，藩籍奉還松前藩は館藩と称し，松前修広藩知事となる。
1871（明治４）年　廃藩置県，館県，松前修広知事となる。
1873（明治６）年　６月，元陣内（西三ノ丸）に梁川小学校創立。
1899（明治32）年　５月，梁川小学校梁川城旧本丸跡に新築。
1919（大正８）年　梁川実科高等女学校旧梁川城南二ノ丸桜館に創立。
1929（昭和４）年　４月，東二ノ丸，小学校校舎木造二階建10教室増設。
1947（昭和22）年　梁川中学校設置。小学校校舎転用。
1957（昭和32）年　梁川中学校旧梁川城東二ノ丸に増築。
1961（昭和36）年　11月，梁川中学校増築完成。
1966（昭和41）年　３月，梁川高等学校屋体完成。
1966（昭和41）年　４月，梁川小学校に梁川幼稚園開設。
1967（昭和42）年　３月，梁川小学校屋体完成。
1968（昭和43）年　梁川小学校改築落成。
1972（昭和47）年　４月，梁川高校改築完成。
1975（昭和50）年　３月，桜岳（旧梁川城北三ノ丸）に町営住宅建設。
1980（昭和55）年　梁川高校プール建設（二ノ丸）。　（梁川町郷土史年表，その他によって作成）

〈 参　考　文　献 〉

(1) 桑原滋郎（1974)「藤田城跡」『福島県考古学年報』3　福島県考古学会

(2) 福島県教育委員会（1980)「金谷館跡」『福島県文化財調査報告』第82集

(3) 田中正能（1975)「厚樫山遺跡」『福島県文化財調査報告書』第47集

(4) 福島県教育委員会（1980)「二重堀跡」『福島県文化財調査報告書』第82集

(5) 永山倉造他（1975)「古矢館遺跡」『福島県文化財調査報告書』第47集

(6) 梅宮茂・八巻一夫（1976)「館ノ内遺跡」『伊達町文化財調査報告書』第1集

(7) 梅宮茂（1977)『霊山寺跡礎石測量調査概報』　霊山町教育委員会

(8) 梅宮茂（1975)「霊山城跡・霊山寺跡」『霊山町史資料集』第1集

(9) 小林清治・鈴木啓・野崎準（1975)「梁川城跡」『梁川町文化財調査報告書』第2集

(10) 鈴木啓・野崎準他（1976)「梁川城Ⅱ」『梁川町文化財調査報告書』第3集

(11) 目黒吉明他（1976ＭＳ)『梁川城調査現地説明会資料（北三の丸跡)』　梁川町教育委員会

(12) 根本信孝（1977)「梁川城跡」『福島県考古学年報』6　福島県考古学会

(13) 宮本利彦（1979)「梁川城跡本丸庭園（心字の池)」『梁川町史資料』第9集　梁川町教育委員会

(14) 鈴木啓他（1979ＭＳ)『梁川城跡本丸庭園「心字の池」復元事業にともなう本丸跡発掘調査現地説明会資料』　梁川町教育委員会

(15) 鈴木啓他（1980ＭＳ)『梁川城本丸跡第2次発掘調査現地説明会資料』　梁川町教育委員会

(16) 野崎準（1975)「梁川町の中世遺跡」『梁川町文化財調査報告書』第2集

(17) 河北新報記事（1980)「梁川城跡に見る草創期の伊達家」

(18) 福島市（1978)『図説福島市史』　福島市教育委員会

(19) 鈴木啓他（1976)「四本松城跡」『岩代町文化財調査報告書』

(20) 永山倉造・岩田敏之（1975)『瀬戸川館遺跡発掘調査報告』　本宮町教育委員会

(21) 田中正能・金崎佳生・渡辺昌宏・高松俊雄（1975)「中村館跡調査報告」『郡山市文化財調査報告書』第22集

(22) 福島県教育委員会（1980)「梅沢館跡」『福島県文化財調査報告書』第81集

(23) 金崎佳生・相原秀郎・高松俊雄（1980)『葉山池遺跡』　郡山市教育委員会

(24) 福島県教育委員会（1975)「高林遺跡」『福島県文化財調査報告書』第47集

(25) 永山倉造（1974)『陣ケ平遺跡発掘調査報告』　須賀川市教育委員会

(26) 永山倉造（1973)「陣場山（坂の下）館跡」『福島県考古学年報』2　福島県考古学会

(27) (財)福島県文化センター（1979)「山田館跡」『福島県文化財調査報告書』第73集

(28) 永山倉造（1974)「宿遺跡発掘調査概要」『県営浜田地区圃場整備事業地内埋蔵文化財発掘調査概報』　須賀川市教育委員会

(29) 永山倉造（1974)「庚申前遺跡」『県営浜田地区圃場整備事業地内埋蔵文化財発掘調査概報』　須賀川市教育委員会

(30) 田中正能（1978ＭＳ)『東久手館跡分布調査報告書』　岩瀬村教育委員会

(31) (財)福島県文化センター（1980)「古館館跡」『福島県文化財調査報告書』第86集

(32) 田中正能（1977)「三芦城跡」『福島県考古学年報』6　福島県考古学会

(33) 小豆畑毅（1979)「三芦城跡」『福島県考古学年報』8　福島県考古学会

(34) (財)福島県文化センター（1980ＭＳ)「細梭城跡」(現地説明会資料)

(35) 首藤保之助・中村五郎（1961)「福島県宮殿遺跡の中世遺物について」『古代学研究』29　古代学研究会

(36) 馬目順一（1978)「真壁城跡調査報告」『富岡町埋蔵文化財調査報告』第1冊

(37) 馬目順一他（1978)『愛谷遺跡の概要』　(財)いわき市教育文化事業団

(38) 松本友之他（1980ＭＳ)『日吉下遺跡現地説明会資料』　(財)いわき市教育文化事業団

(39) 松本友之（1977)「館跡遺跡」『福島県考古学年報』6　福島県考古学会

(40) 馬目順一・松本友之他（1980)「八幡台遺跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第５集　(財)いわき市教育文化事業団
(41) 岡田茂弘・進藤秋輝・鈴木啓（1974)『新宮城跡』　喜多方市教育委員会
(42) 鈴木啓（1976)「新宮城跡」『福島県考古学年報』５　福島県考古学会
(43) 小滝利意（1977)「明石塚館跡」『福島県河沼郡河東村郡山地区遺跡発掘調査報告』　河東村教育委員会
(44) 小滝利意（1977)「本宮館跡」『福島県河沼郡河東村郡山地区遺跡発掘調査報告』　河東村教育委員会
(45) 長尾修他（1979)『鳴山城跡発掘調査概報』　田島町教育委員会
(46) 長尾修（1980)「鳴山城跡」『福島県考古学年報』９　福島県考古学会
(47) 加藤孝・野崎準（1976)「奥州伊達郡梁川城跡ー東北地方中世城館跡の一例ー」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第７号
(48) 谷口悟（1979)「梁川時代の松前藩と城下絵図」『梁川町史資料』第９集　梁川町教育委員会
(49) 八巻善兵衛（1975)「松前藩の梁川移封」『梁川町史資料』第４集　梁川町教育委員会
(50) 梁川町郷土史研究会（1979)『梁川町郷土史年表』(再刊)　梁川町教育委員会
(51) 松浦丹次郎（1979)「栗野の地名由来と伊達三代考」『梁川町史資料』第９集　梁川町教育委員会
(52) 鈴木啓（1980)「福島県における中世城館研究の動向」『福島史学研究』復刊第29・30号　福島県史学会
(53) 加藤孝・野崎準（1974)「石造宝塔考」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第６号
(54) 野崎準（1980)「中世の梁川城ー陸奥国守護職の「小京都」ー」『福島史学研究』復刊第29・30号　福島県史学会
(55) 鳥羽正雄（1971)『日本城郭辞典』　東京堂出版
(56) 伊禮正雄（1977)「中世城館址の調査」『考古資料の見方（遺跡編）』　柏書房
(57) 鈴木啓（1980ＭＳ)『城館跡の見方と調査法』(昭和55年度県発掘技術講習会講義資料)
(58) 井上宗和（1973)『ものと人間の文化史・城』　(財)法政大学出版局
(59) 三輪茂雄（1978)『ものと人間の文化史・臼』　(財)法政大学出版局
(60) 内藤昌他（1979)『城の日本史』　日本放送出版協会
(61) 福島県教育委員会（1971)「福島県の寺院跡・城館跡」『福島県文化財調査報告書』第25集
(62) 福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所（1973～1980)『一乗谷朝倉氏遺跡』Ⅳ～Ⅺ
(63) 畠山憲司・横本高史他（1980)「鵜沼城跡発掘調査報告書」『秋田県文化財調査報告書』第73集
(64) 篠原信彦他（1980)「今泉城跡ー発掘調査報告ー」『仙台市文化財調査報告書』第24集
(65) 石川長喜・昆野靖（1980)「柳田館跡」『岩手県文化財調査報告書』第53集
(66) 小林清治他（1969)『福島県史』第１巻
(67) 小林清治他（1977)『国見町史』第１巻
(68) 藤沼邦彦（1976)「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察)」『東北歴史資料館研究紀要』第２巻
(69) 石田茂作他（1976)『新版仏教考古学講座』第３巻（塔・塔婆）　雄山閣
(70) 吉田義・伊藤七郎・鈴木敬治（1968)「福島ー郡山間の第四系」『第四紀』No.13　第四紀総合研究会誌　福島シンポジウム特集
(71) 目黒吉明編（1981)「福島県」『日本城郭大系』第３巻　新人物往来社

〈調　査　要　項〉

遺跡名	梁川城跡（二ノ丸土塁）
所在地	福島県伊達郡梁川町字鶴ケ岡33番地
種別	城跡
時代	（鎌倉？）室町 ～ 江戸時代
立地・地目	丘陵先端部・学校用地，宅地，農地，公園
発掘調査主体者	福島県教育委員会（教育長・辺見栄之助）
担当課	福島県教育庁文化課
調査期間及調査担当者・調査員	第1次調査　期間　昭和54年10月1日～10月5日（5日間） 担当者　木本　元治（福島県教育庁文化課　文化財主事） 調査員　佐藤　博重（福島県教育庁文化課　文化財主査） 第2次調査　期間　昭和55年1月8日～1月10日（3日間） 担当者　木本　元治（福島県教育庁文化課　文化財主事） 調査員　日下部善己（福島県教育庁文化課　文化財主事） 第3次調査　期間　昭和55年4月17日～5月19日（21日間） 担当者　日下部善己（福島県教育庁文化課　文化財主事） 調査員　佐藤　利夫（川俣地方史研究会　会員） 同　福島　雅義（〔財〕福島県文化センター遺跡調査課文化財主事）…2日間のみ
調査協力者	木村　正七，谷口　悟（梁川町教育委員会），阿部　常雄，幕田　昌司 宮本　利彦（梁川町郷土史研究会），五十嵐清治，安藤　芳雄（梁川高校） 梁川高校社会部（顧問・本田ともみ），菊池　利雄（福島県史学会）
整理担当者	日下部善己，佐藤　利夫，鈴鹿八重子，高橋　典子，菅野　順子，鈴木　文雄，長島　雄一
発掘調査作業者・協力者	石川　俊子，岩谷　久子，伊藤　弘子，斎藤ヨシ子，飯沼テイ子，林　トリ，吉田すみ子 八巻美千子，後藤美知子，斎藤　修子，加藤　京子，西村ツヤ子，松野　幸夫，佐藤みよ子 佐藤　トヨ，北島　ナツ，横山多喜子，宍戸ハツヨ，今野　正弥，紺野みゆき，岩崎　要助 斎藤　三夫 梁川高校社会部員（部長・萩原　信男，三浦　誠兄，菅野　芳則，酒井　泰則，大槻裕美子 古山志津子，斎藤　典子，佐々木浩子，橋内　成江，斎藤佳代子，北越恵美子，大友恵美子） 株式会社太田工務店 福島建設事務所
整理作業者	永山きくよ，叶　敦子，森山　宗子，渡辺　祥子，橋本　純子，安藤富美子，有我志津子 久能　令子，鳴原　由恵，八城　敏子，大橋　圭子，渡辺　泰子，明石　米子，長野　ミイ 佐藤　恭子，菅野　靖子，市川佐知子，阿部　孝子，紺野　光枝，紺野　朋子，小原カツヨ 小原　幸子，永倉　静子，永倉美恵子，平野　ハル，近藤　芳子，小島　珠，吉沢ふみ子 斎藤　幸子（順不同）

〈事　　務　　局〉

福島県教育庁文化課　遺跡班及び文化財保護係　（昭和55年度）

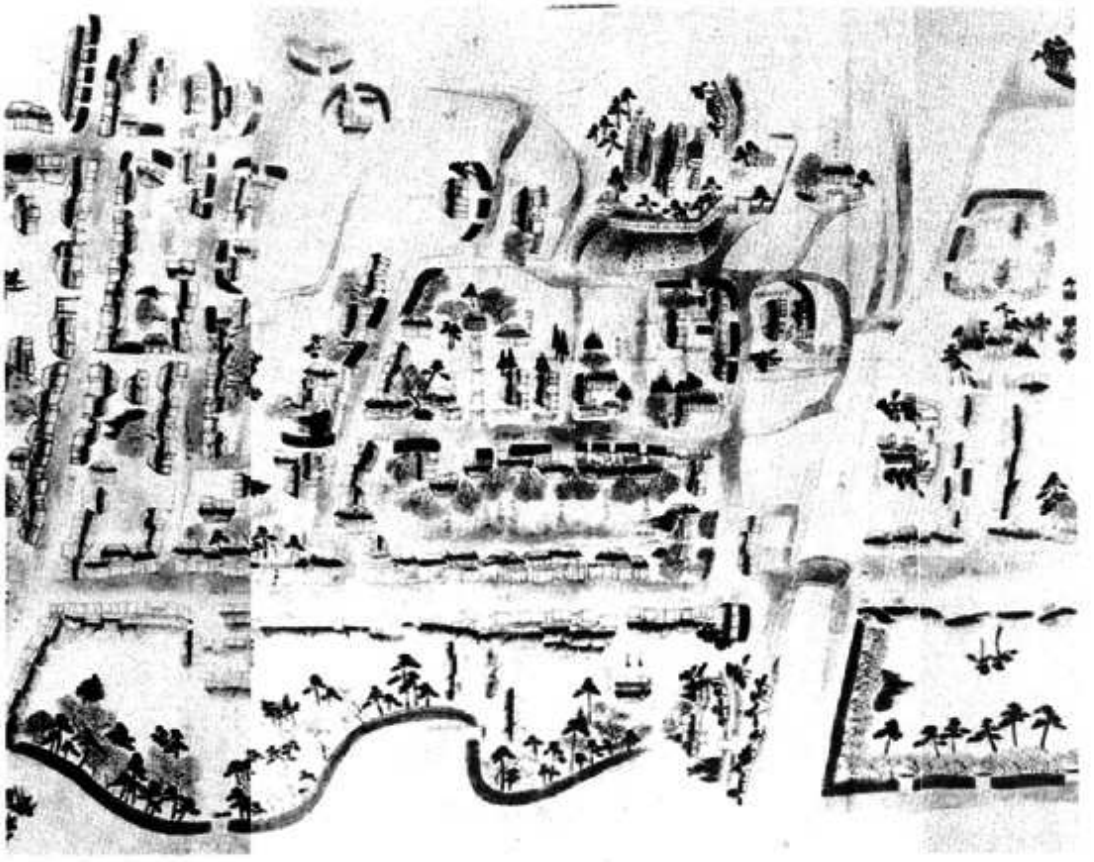
文化課長
　瀬戸清彦
主　幹
　皆川郁夫
課長補佐
　佐藤昭吾

〈遺　跡　班〉
専門文化財主査　日高　勇
文化財主査　佐藤博重
文化財主査　木本元治
文化財主事　日下部善己
嘱　託　鈴鹿八重子
嘱　託　高橋典子
嘱　託　菅野順子
嘱　託　鈴木文雄
嘱　託　長島雄一

〈文化財保護係〉
主任主査兼文化財保護係長　菊田謙一郎
専門文化財主査　竹川重男
専門文化財主査　懸田弘訓
主　査　大河原敬次
主　査　斎藤勝正
事務補助員　菱沼裕子
事務補助員　今野郁子
事務補助員　渡辺幸江

図　版

栗川城跡航空写真（1：4000）



1．梁川城絵図・北海道開拓記念館所蔵（谷口悟1981、梁川町教育委員会1980より）
2．大森城跡遠景　3．大仏城跡遠景　4．松前城跡

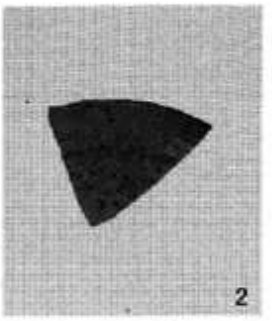
1．梁川城跡遠景（東より）　2．梁川城跡・磨崖仏遠景（南より）　3．梁川城図（横崎波雲筆）（梁川小学校蔵、「梁川町の文化財」より）

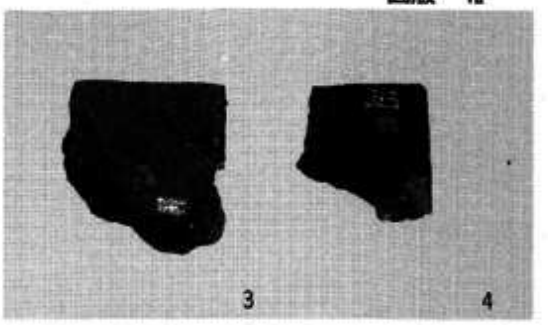
1．本丸東櫓（石垣）東川町教育委員会復元　2．本丸土塁　3．二ノ丸土塁遠景（北より）
4．二ノ丸濠（金沢堀）　5．三ノ丸堀（土橋上より）

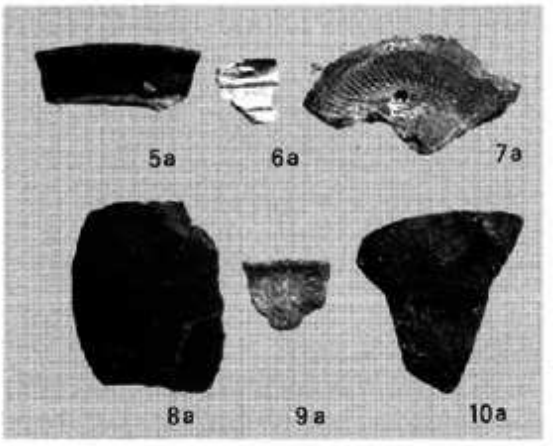
1．二ノ丸土塁近景（東より） 2．土塁発掘状況（西より） 3．土塁北トレンチ
4．第1号集石遺構　　5．第1号集石遺構（北部分）

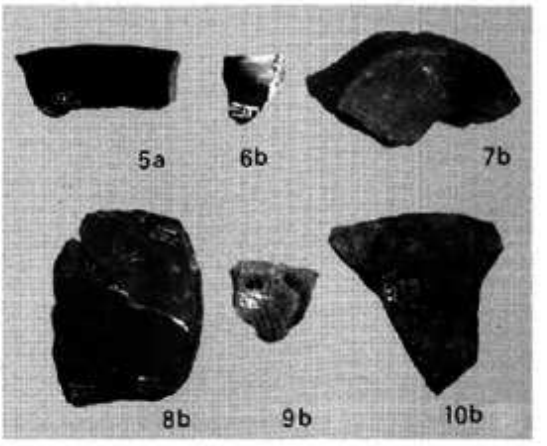
1．発掘状況　2．第５トレンチ北壁土層　3．第２号集石遺構（南より）
4．第２号集石遺構（北より）5．木組遺構

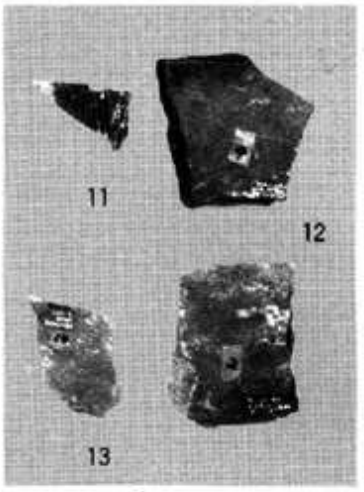
1

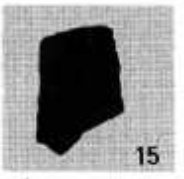

2


3
4

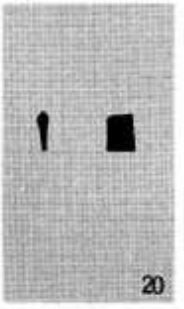

5a
6a
7a
8a
9a
10a


5a
6b
7b
8b
9b
10b


11
12
13

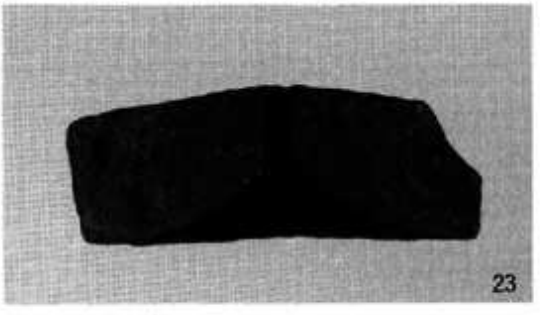

15

16
17
18
19


20

21

22


23

1

2

3a

3b

5

4a

4b

4c

6

文化庁では、文化財愛護運動を押し進めるための旗じるしとしてのシンボルマークを定め、昭和41年5月30日の文化財保護法公布記念日に発表しました。このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗栱(ときょう)(組みもの)のイメージを表わし、これを3つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

文化財愛護シンボルマーク

福島県文化財調査報告書　第94集

梁川城跡 ―二ノ丸土塁発掘調査報告―

昭和56年2月20日　印刷
昭和56年2月28日　発行

発行　福島県教育委員会
〒960 福島市杉妻町2－16 ☎(0245)21－1111(代)

編集　福島県教育庁文化課

印刷　キング印刷株式会社
〒960 福島市太田町11－27 ☎(0245)35－3358(代)

1981